

「ユンユン とんとん ポロンぽろん」

芳崎 洋子

〈登場人物〉

小磯 彩  
こいそ あや

泊 亮子  
とまり りょうこ

三宅 詩織  
みやけ しおり

榎本 みちる  
えのもと

江藤 由実子（救急隊員1）  
えとう ゆみこ

廣田 武也（救急隊員2・ヘルメットを被った男）  
ひろた たけや

1・午後三時

彩 これ、おかしいよ！

と、彩の大きな声。

そこは、小学校の古びた体育館。その壁には、あちらこちらにひび。

向かい合って立っている小磯彩、三宅詩織との間に、泊亮子がしゃがんでいる。

詩織 何が？

彩 おかしいじゃん、これ。

詩織 だから何がおかしいん？

彩 だってさ、なんで泥棒とか火事とか地震なら「あー、良かった」な訳？

詩織 : : さあ。

彩 なんでおぼけなら「キヤー」なの？

亮子、立ち上がりながら、

亮子　しゃあないやん、元々そうやねんから。

彩　元々ってねえ、

亮子　（遮って）じゃあ、なんでハンブテイ

ー・ダンプテイーは卵なん？

彩　え？

亮子　ハンブテイー・ダンプテイー。

彩　知らないよ、そんなこと。

亮子　そやろ？　それと一緒にやねんって。

彩　納得いかないな。だいたいなんでハンブ

テイー・ダンプテイーが出て来んのよ。

亮子　中学の英語の教科書に載ってたやん。

（詩織に）なあ。

詩織　何なん？　それって。

亮子　あつたやん。卵のくせに背広着てネク

タイしめてる気しよいやツ。そんでなんか

壁の上歩いて落っこちんねん。

彩　塀の上。

亮子　（詩織に）塀の上。

詩織　あつたかなあ、そんなん。

亮子 インパクトあったやん、あの変な絵。

一遍見たら忘れへんわ。

詩織 英語の教科書、違ちがたんかも知れん。泊  
さんと。

亮子 なんでよ。ほら、二人で教科書並べて  
一緒に訳したやん、辞書引いて。

詩織 あれ：：、三好さんちやうかった？

亮子 ちやうよ、詩織ちゃんやって。

詩織 私、人と一緒に勉強した事ないで、あ  
そこで。

亮子 そうやっけ？

詩織 (考えながら) うーん、多分な。どこ  
の出版社やった？

亮子 え？

詩織 英語の教科書。

亮子 そんなん覚えてへんわ。

詩織 私はな、あれ、ほら：：、何やったつ  
け。

彩 もうイイじゃん、そんなの。早くしよ。

亮子 早くしよって、止めたん自分やん。

彩　ごめんごめん。ほら。

と、亮子を前に、詩織に両手を差し出す彩。

詩織　：　：　何やったかなあ、あの出版社。

と、詩織は考えながら、亮子を挟んで、彩と両手をつなぐ。

亮子　もうエエからエエから。忘れた事はどうでもエエねん。

と、亮子は、再びしゃがんで、両手で顔を覆った。

詩織　なんか気持ち悪いなあ……。

彩　ほら行くよ。せーの。

と、彩と詩織は、歌いながら亮子の

周りを歩き出す。

彩・詩織 ♪ あーぶくたった にえたった

にえたかどうだか たべてみよ

むしやむしやむしや まだにえない

あーぶくたった にえたった

にえたかどうだか たべてみよ

むしやむしやむしや もうにえた ♪

彩と詩織は、両手を放し、動作をし  
ながら、

彩・詩織 鍵をかけましょ、ガチャガチャガ  
チャ。お風呂に入ろう、ゴシゴシゴシ。お  
布団敷いて寝ましょ。

と、しゃがむ彩と詩織。

亮子 トントントン。

彩・詩織 何の音？

亮子 風の音。

彩・詩織 あー、良かった。

亮子 トントントン。

彩・詩織 何の音？

亮子 泥棒が来た音。

彩・詩織 あー、良かった。

亮子 トントントン。

彩・詩織 何の音？

亮子 隣の家が火事の音。

彩・詩織 あー、良かった。

亮子 トントントン。

彩・詩織 何の音？

亮子 地震が来た音。

彩・詩織 あー、良かった。

亮子 トントントン。

彩・詩織 何の音？

亮子 おぼけの音。

彩・詩織 キャー。

と、彩と詩織は、逃げ出す。

それを追いかけて、亮子は詩織を掴まえる。

三人、息を切らしながら、

亮子 掴まえた。詩織ちゃんの鬼。

詩織 またかあ。

彩 ねえ、ちよつと休憩しよ。

亮子 アカン。

彩 そんなこと言わないで休憩しようよおー！

亮子 さっきしたとこやん。こういうのはノリノリでするからおもしろいねん。

彩 ノリノリでやってるじゃん、19回も。

(詩織に) ねえ、詩織。

亮子 17回。(詩織に) 休憩なんか要らんよなあ。

詩織 (考え込んで) : : うーん。

彩 じゃあ、他のにしよ。つまんないよ、こればっかりじゃ。

亮子 これが一番エエんやって。



彩 どうして。

亮子 ほな、氷鬼しよか？

彩 ダメ。あれ、走りっぱなしで疲れるもん。

亮子 ほな、花一もんめ匆めは？

彩 あれ動き少ないじゃん。もう忘れたの？

亮子 何を。

彩 しよっぱなにあれやって寒くて凍え死に  
そうだったでしょ。

亮子 やろ？

彩 え。

亮子 そやからこれが一番エエの！ 適度に  
走って適度にしゃがんで。バランス取れて  
るやん。

彩 あゝあ：：。欲しいよなあ、暖房くらい。

亮子 ただで借りてんねんから文句言わない  
の。

彩 なんで体育館っていつつも寒いんだろ  
ね。こうガラーンとしてて足元からジワッ  
ッと冷えて来る感じ。

亮子 マジで運動する人らに合わせてるんや

ろ。

彩 誰がすんのよ。こんな小学校のボロ体育館で。

亮子 このこの予約表に書いてあったで。ママさんバレーとか、部活のOB会とかいろいろ。

彩 マジで運動なんかしたらここ潰れちゃうよ。見た？

亮子 何を。

彩 壁。ひびだらけじゃん。

亮子 ひび？

彩 うん。前は無かったよ、あんなひび。でも今はあっちもこっちもひびだらけ。気持ち悪いくらいビヤ〜って走ってる。

亮子 出るで出るで。

彩 何が。

亮子 体育館の花子さん。

彩 何それ。

亮子 学校におばけって付き物やん。

彩 おばけ？

亮子 うん、学校の怪談話。ウチ、小さい頃、  
真剣に怖かったわ。

彩 へえー。

亮子 へえー、ってあったやろ？

彩 無いよ、おばけの話なんか。

亮子 え。ほな、小さい頃何が怖かったん？

彩 うーん、何かなあ……。ガン？

亮子 ……彩ちゃんて小さい頃から病気の  
事、気にしてたん？

彩 違う違う。(撃つ真似をして)ダウン、  
ってこっちのガン。それとレイプに麻薬か  
な、怖かった物って言えば。

亮子 へえー……。。

彩 あー！ だから「おばけの音」でキャー  
なんだわ。

亮子 え。

彩 日本では泥棒や火事や地震よりおばけの  
方が怖いよ。ほら、洗脳って言うの？  
幼い頃からの刷り込み。おばけは怖いぞっ  
て。

亮子 とかなんとか言って強引に持ってって  
るな、彩ちゃん。

彩 何？

亮子 休憩に。

彩 ばれてた？

亮子 アカンで、（両手を差し出して）やろ。

彩 いいじゃん、休憩しようよ。

亮子 アカンアカン。真面目に働かな。

彩 何それ。私はもう覚えたからいいよ。（壁  
の時計を見て）ほら、ちようどおやつの時  
間だしさ。

亮子 要らんって、おやつなんか。（詩織に）  
なあ、詩織ちゃん。

詩織 （考えながら）：：やっぱり小磯さん  
の言う通りかも知れん。

亮子 詩織ちゃんまで言うかあ？

彩 はい、多数決。休憩しよ。

詩織 （大きい声で）ちやうねん、さっきの  
話。“トントントン。何の音？”の事。

彩 なんの事？

詩織 なんの事って、小磯さん、さっき言う  
たやん、おかしいって。泥棒や火事や地震  
やったら「あー、良かった」で、おばけや  
ったら「キヤー」って言う事。

彩 ああ、忘れてた。

詩織 今も言うてたやん。おばけの事。

彩 そうだっけ。

詩織 笹ざるの脳味噌、地で行ってんなあ。

亮子 詩織ちゃん、黙っているとおも思たらずーつ  
とそんな事考えてたん？

詩織 だって気になるやん。

彩 居るよね、そうゆうヤツ。

詩織 なんでやるって思うやん。

亮子 (やや大きな声で) そやから！ 元々  
そういうもんやねんって。

詩織 でもやっぱりおかしいわ。だって“ト  
ントントン”やねんよ。

亮子 はあ？

詩織 だからな、もし泥棒やったらそんな音  
たてへんやん。コソドロって言うくらいや

ねんからコソツとな、

亮子 （遮って）強盗かも知れんやん。

詩織 それやったらもっと激しいやろ？ “

ドンドンドン” って。

亮子 上品な強盗やの。

彩 そうよ、そう。火事だったら（大きな動作を付け）“ゴーゴー メラメラメラ：：” でしょ？ で、地震だったら（さらに激しく）“ガタガタガタ ガタンガタン バターンドシーン ドカーーン” だよね、普通。

亮子 どこが普通や、そんな派手なん。

彩 だから激しさが違うって事、“トントントン” とは。

詩織 （同調して）そうそう。この遊びの音ってな、“トントントン” って言うわりに濁音系の物ばっかしやん。

彩 （詩織に）“だくおんけい” って？

亮子 なんや、まだ漢字苦手なん？

彩 そんな事言うけどさあ、漢字って中学で

こっち来て一から覚え始めたのよ。覚えきれぬ訳ないじゃん、「バイオ・ハザード」なんだから。

亮子 何それ。

彩 知らないの？ 「バイオ・ハザード」

亮子 プレ・ステヤろ。それは知ってるよ。

でも漢字とどうゆう関係があんの。

彩 英語の単語は二六文字の組み合わせでしょ。だけど漢字ってさ、覚えたと思ったら次から次に新しいのが出て来んの。撃つても撃つても現れるゾンビと同じだよ。空しいだけの努力。

詩織 すごいなあ、その例え<sup>たと</sup>。

亮子 変な例え<sup>たと</sup>。

彩 日本人て偉いよ。普通覚えらんないよね、無限大ほどある象形文字なんか。

詩織 でも小磯さん、その分、英語しゃべれるやん。

彩 英語だって使わないと忘れるんだから。

亮子 ほな、中途半端って事やな。

彩 宿命だもん、帰国子女の。

亮子 (頬を押さえ) 痛っ！

詩織 どうしたん？

亮子 彩ちゃんの鼻が刺さった。

彩 それって何？ 私が自慢してるって事？

亮子 そうちやうかったん？

彩 ま、そうとも言うか。(詩織に)で、さ  
っきのは？

詩織 え？

彩 ほら、なんとかって言ってたでしょ、こ  
の遊びの音はなんとかばっかして。

詩織 え：：、何やろ：：。

彩 筧ざるの脳味噌、地で行ってる。

亮子 濁音やろ。

詩織 ああー。点々が付いた音。

彩 てんてん？

詩織 “トントン”とか“カンカン”とか“  
コンコン”って点々付いてないやん。でも  
な、点々付いたら“ドンドン・ガンガン・  
ゴンゴン”ってなるやん。



彩 ああー、激しい音って事？

詩織 ちやうよ、ただの点々付いた音。

彩 ふーん。

亮子 どうせウチが作るのは激しいですよ。

彩・詩織 （亮子を見て）え？

亮子 “え”って？

彩 “ウチが作る”って？

亮子 “ウチが作るって”って？

彩 亮子を作ったの？ この遊び。

亮子 そんな訳ないやん、元々やって。

彩 だよね。

詩織 ほな、なんで泊さんが作ったら激しい

の？

亮子 ちよっと待ってよ。好きに作れるやろ、

“トントントン。何の音？”のとは。

彩 どうゆう事？

亮子 いややな、もお！ やったやろ、小さ

い時、この遊び。

彩 （詩織に）やった？

詩織 どうやろ：：。

亮子 まさかこんな小さい時からしてたん？

登校拒否。

彩 アメリカにないもん、こんな遊び。

亮子 詩織ちゃんは？

詩織 さあ：：。

亮子 はあく、もうエエわ。（気を取り直し）

あんな、“トントントン。何の音？”のと

こは鬼が自分の好きな音言ったらエエねん。

“風の音”でも“車の音”でも“強盗が来た音”でも何でも。

彩 でもさあ、19回ともぜーんぶ同じだったよね。

亮子 17回。自分らがウチの真似して同じ事ばっかし言うたんやろ。

詩織 だって変えられるなんて思わへんやん。

泊さん、いっつも同じ事言うてたし。

亮子 ウチ気に入ってたねん、このバージョン。

彩 って事はあ、亮子のオリジナルだった訳？

亮子 まあ、言うてみれば（彩の発音を真似て）“オリジナル”ではないけど（関西弁で）“オリジナル”やわな、半分はウチの。詩織 アホらしいー。そんなん初めに言うてくれたら良かったのに。

彩 ほんとよお。そしたらもっと別の楽しみ方したのに。（詩織に）私達も、ねえ。

亮子 そんなん言う？ 誰かて知ってるって思うやん、こんな遊び。

彩 知らないから今日来たんでしょ。

亮子 何それ。

彩 日本の伝承遊び教えてくれるって。

詩織 “でんしようあそび”って？

彩 留守電に入ってたの、そう言って。だから辞書で調べたよ。

詩織 ほな、なんて？

彩 昔から伝わる遊びとかなんとか……。

亮子 誰も教えへんで、そんな物もん。普通はみんな知ってるの。

彩 知らないよ、（詩織に）ねえ。

詩織 うん。

亮子 絶対知ってるって。詩織ちゃん、忘れてるだけやわ。

詩織 そうかなあ……。

彩 困るよ、ちゃんと正しく教えてくれなきや。

亮子 何？ 何なん？ ウチが悪い訳？

彩 そ。

詩織 悪いって言う訳やないけど……。

亮子 エエよ、エエよ。みんなしてウチをいじめたらエエねん。

彩 出ました、いじめられっ子の特徴。炸裂する被害妄想。

亮子 そんな言葉だけ知ってんねんから。もおー！ お母ちゃんに言いつけたるうー。

と、亮子は、顔を覆って泣き真似をしながら、しゃがみこむ。

詩織 またあ。

彩 誰にでも言っつて、お母ちゃんでもお父ちゃんでも彼氏にでも。

亮子 (一瞬、顔を上げ) 彼氏なんか別れたところや、ワァーン！

と、再び顔を覆う亮子。

その時、廣田武也が、三人の所に駆け込んで来た。

武也 おいおい！ エエ年して弱い者いじめすんなや！

彩・詩織 (呆氣に取られ) ……え……？

亮子も、顔を上げ、武也を見る。

武也 (彩と詩織に) さっきから見とったら二人してイチャモン付けとるやないか、一人を相手に。その前もこの子がしゃがんで泣いてんのに二人で頭ドツいてたん、ちゃーんと知ってんねんで。可哀想やと思わん

か？ 大人やったら口で言えや、口で。逃げようとしてんの走って掴まえてまでいじめる事ないやろ。ほんま、女は陰湿やで。

詩織 （彩に）イチャモン付けてんの、どっちよなあ。

彩 （武也に）ちゃーんと知ってるって何処で見たって言うのよ。

武也 そんなん何処からでも見えるわ、こんな場所。丸見えや。

彩 （小声で詩織に）体育館の中が丸見えだつて。

詩織 （小声で彩に）もしかして千里眼かな？

彩 （詩織を肘で突つき、小声で）また漢字使う。

武也 何ゴチャゴチャ言うてんねん。謝れや、この子に。泣いとるやないか。

と、亮子を見る武也。

亮子、立ち上がり、

亮子　ウチ、泣いてないで。

武也　えっ？

亮子　こんな事で泣くかいな。

武也　そ、そりゃ君がじっと耐えてるのは分かるで。そやけどさつき「わぁーん」でデカイ声で、

亮子　（遮って）ウチは泣いてない！

武也　（焦って）でもな、ほら、いじめられて黙っとってもアカンで。相手も凶に乗るしな。

亮子　いじめられてもないで、ウチは。文句は言われたけどな。

武也　（再び力を込め）そやろ？　そやからドツかれたんやろ、この二人に。

亮子　ドツかれた覚えもない。ウチらはただ遊んでただけや、（彩と詩織に）なあ。

彩　うん。

武也　遊んでた、ってこんなところで？

詩織　そうや。

武也　：：遊んでる風には見えんかったけど

なあ。

詩織 何？

武也 あ、いや、じゃあ何して遊んどったんや？

彩 なんでもいいでしょ、あなたには関係ないんだから。

武也 ……まあ、関係ないと言えれば関係ないけどやな。

亮子、気まずい場に慌てて、

亮子 「あぶくたった」

武也 え？

亮子 あるやん。(歌いながら)「あーぶくたった」ってヤツ。

武也 ああ！ あのガキン頃にするヤツ？

亮子 (顔が輝き) ほら、やっぱりやるよなあ、小さい頃。

武也 あれやろ？ 真ん中に鬼が入って、  
亮子 そうそう。



武也 目えつぶって、

亮子 そうそう。

武也 “だるまさんがころんだ” って数える  
やつ。

亮子 ちよつとちやうわ。

武也 そうか？

亮子 他にもしたで、“氷鬼”とか“陣取り”  
”とか“花一もんめ匁”とか色々。

武也 自分らが？

亮子 うん。

武也 たった三人で？

亮子 ：エエやろ。

彩 だからすぐ終わんのよ。

詩織 他にも来るはずやねんけどなあ：：。

と、壁の時計を見る詩織。

武也 自分ら、学校の先生とか？

詩織 なんです。

武也 授業の研究かなあつて：：。

亮子　なんで授業の研究なんよ。

武也　だって普通せんやろ。わざわざ学校休みの日にエエ年してそんな昔の遊びばっかし。

彩　失礼な人。エエ年って。

武也　ほな、なんで、

亮子　（遮って）そや、一緒にする？

武也　俺？

彩　亮子。

亮子　エエやん、多い方が楽しいし。（武也に）一緒にしようや。

武也　アカンアカン。俺、バイト中やから。

詩織　バイト？

武也　ああ。日曜祝日は職員みんな休みやろ。

そやから守衛のバイト。

亮子　暇なんちゃうん。する事なくて。

武也　アホ言え。週末はここ校庭とか一般に開放してるやろ。何があるか分からんで。

彩　だから飛んできたんだ、正義のヒーローみたいに。

武也 そんなカツコ良かったか？ 俺。

彩 まあ、マントを忘れたヒーローね。

武也 何や、それ。

彩 カツコ悪いだけ。

武也 ：：そうか。

少し肩を落とす武也。

亮子、その様子に取り繕って、

亮子 と言うより印籠忘れた水戸黄門やな。

武也 それってただのジジイやんけ。

亮子 (少し慌てて) ま、悪と戦う事には変わ  
りない。

武也 そうゆう事にしとこか。ほな俺行くわ。

悪かったな、中断させて。

彩 こっちこそそちらの御期待に沿えなく  
て。

武也 嫌味言うなや。ほな。

と、武也は、去って行く。

亮子、その後ろ姿に向かって、

亮子　また来てな！　待ってるし。

と、声をかける。

彩　亮子。

亮子　（尚も武也の後ろ姿を見送りながら）  
ん？

彩　ナンパすんなよ、こんなところで。

亮子　ナンパちゃうで。

詩織　でも泊さんの視線、ちよつと熱かった  
で。

亮子　ナンパではない。

彩　それって何よ、実は本気とか？

亮子　かも知れん。

詩織　えーっ？

彩　あれ位の男ならそこらへんにゴロゴロ居  
るって。

亮子　居おらへんよ。

彩 居いるって。

亮子 居おらんよ、今時。いくらバイトやからって他人のケンカに割って入るようなヤツ。

詩織 刺されるで、そんな事したら。

亮子 やろ？ 希少価値やで。

彩 自分が大変な目に遭ってる時に助けくれるってか？

亮子 そうや。

彩 どんな時でも味方になってくれるって？

亮子 そう！

彩 へえー、白馬の王子様タイプがいいんだ。

亮子 みんなそうちゃうん？ しんどい時、

誰でもエエから助けてって思うやん。ドアを叩いて踏み込んでって思うやん。

彩 でも開けてみたら母親のふりした狼だったりもする。それで迂闊に信じた子山羊達は狼の腹の中。

詩織 あ、それは知ってる。「狼と七匹の子山羊」

彩 そ。人を信じるなって事。簡単に信じた

り期待したりするから裏切られたって思う  
んでしょ。

詩織 期待？

亮子は、面白くない。

彩 うん。(詩織に)では、問題です。人間  
はどんな時にガツカリするでしょう。

詩織 んー：：。

彩 さあさあ。

詩織 思い通りにならなかった時？

彩 大正解。だけどその“思い”ってさ、実  
はその人が勝手に作り出してる物じゃない。  
こうなればいいのに、とかこの人はこうし  
てくれるはず、とか勝手にさあ。それでそ  
うならなかった時、ガツカリするでしょ。  
結局は自分勝手に信じたり期待さえしなき  
や裏切られる事も無い訳よ。

詩織 まあ、理屈は分かるけど、人って信じ  
たり期待したりしてしまいうん、普通。ド

ア開けたら優しいお母さんが居るとか。

彩 そうゆうおバカさんはみんな狼の腹の中に行くの。子山羊でも赤頭巾でも三匹の小豚でもみんな。

詩織 でもなあ……。

彩 何？

詩織 最終的にはみんな助かるやん、どの話も。悪い狼はいつつもやっつけられて。

彩 日本ではね。

詩織 え？

彩 日本は何でも丸く収めたがるから棘とげのある物もみーんな丸くなる。童話もね。

詩織 そう言えば流行はやったよなあ。“グリム童話はこんなに怖いでえ”みたいな本。日本で信じられてる結末はほんまはもつとエグいんやって本がいろいろ。

彩 丸い事がいいって限らないのにさ。子供ん時から世の中、甘くないって教え込まなきゃダメだよ。そんなんだからひ弱で世の中に対応出来ない子が多くなるって言うの。

詩織・亮子　　：：え：：。

彩を見る詩織と亮子。

彩　　：：別にそんな意味じゃないよ。

亮子　（不機嫌そうに）ウチ、喉乾いた。飲

む物もんこ買かうて来るわ。

詩織　私も行こか？

亮子　エエよ、一人で。何か要いる？

彩　私、要らない。

亮子　詩織ちゃんは？

詩織　ごめん、私持って来てん。

亮子　ふーん。

と、亮子は、鞆を持って去る。

詩織　なんか悪かったかな：：。

彩　なんで？

詩織　いや、なんとなく。

彩　案外、亮子、さっきの人探しに行ってた



りして。

詩織 さっきのって？

彩 守衛のバイトしてる彼。

詩織 それは無いやろ。

彩 ううん、分かんないよ。

詩織 : : 小磯さん : : 。

と、彩を見つめる詩織。

彩 ん？

詩織 (気を取り直し) 小磯さんは今何して  
んの？

彩 仕事？

詩織 うん。

彩 英会話教室で教えてる。

詩織 へえー、似合ってるな。

彩 それ位しか無いし、出来る事って。

詩織 上の人で幾つくらい？

彩 年？

詩織 うん。

彩 中学生かな。

詩織 上の人やで。

彩 そ。上は中学生。下は三才から。

詩織 ああ、子供に教えてるんや。楽しそうやね。

彩 大人相手の方がいいよ。子供って訳分からない。

詩織 可愛いやん。

彩 可愛い子も確かに居るけどさあ、憎たらしい子多いんだな、これが。私の仕事って教えるのが三〇%で、残りの七〇%は子供の御機嫌取り。バカみたいな仕事よ。

詩織 大人のクラスは無いの？

彩 あるよ。あるけどさ、大人はどうせなら外人に習いたいって思う訳。たとえ相手は何言ってるか分かんなくても雰囲気味わえればそれでいいみたい。金払ってまで日本人に習う気は無いんだって。

詩織 そんなもんかあ……。でも子供に教えるなんて羨ましいけどなあ。

彩 私きつと子供、嫌いなんだわ。学校の先生になりたいなんて言う人自体おかしいしね。あれって何、ほら自分に自信がないから自分より弱い者の上に立って安心してたかって気持ち？ 自分でも役に立つんだっていう満足感が欲しいだけだと思わない？

詩織 ……そうかなあ。

彩 教師だけじゃないよ。福祉関係とかボランティアとか、あ、ほら医者や看護婦だってそうじゃん。この人より私はマシ。だから私はこの人の役になら立てるってさ。

詩織、彩を見ながら、自分を指さしている。

彩 ん？

詩織 ……。(尚も自分を指さしている)

彩 何？

詩織 私、今、看護婦やってんねん。

彩 え…？ そうなの？

詩織 うん。まだ働きながら看護学校行って  
んねんけどな。

彩 へえー、そうなんだ。

詩織 そう。

彩 怖くない？

詩織 何が？

彩 だって血見るんでしょ？ 交通事故とか  
撃たれた人とかさあ。怖いじゃん。

詩織 撃たれたって、そんな、

彩 だって居るでしょ？

詩織 私が行ってるとこ個人病院やし、あん  
まり来<sup>け</sup>えへんねん、そんな人。

彩 でも怪我した人とかは来るでしょ。

詩織 まあ、ガラス刺さったりとか骨折った  
りとかはな。

彩 私、血見ると貧血起こすのよ。

詩織 毎月見てるのに？

彩 アレは別。

詩織 学校の実習で手術見学とかあるけど  
な、女の子は結構平気で見てるで。医学部

の男の子の方がひどいねん。

彩 ひどいって？

詩織 手術中に急に倒れんねんて、バターン  
って後ろに。この前なんか五人のグループ  
で続いて三人倒れて、手術どころやなかつ  
たって医者ボヤいてたわ。

彩 それ分かるわ。

詩織 医者 of 気持ち？

彩 違う違う、倒れる気持ち。

詩織 でもな：：、病院で働いてるとだんだ  
ん麻痺してくんねん、感覚が。血見ても、  
痛がってる人見ても、亡くなった人見ても  
なあんにも感じへん。私はその日の仕事を  
時間通りに失敗なくやったらエエンやって  
思えてくるねん。

彩 そんなもんでしょ、仕事って。

詩織 そんなんでエエンかなあって思ったり  
もすんねん。

彩 いいのいいの、お金の為に働くんだから。

（誰かが来るのを認め）：：あれ。

榎本みちるが、急ぎ足でやって来る。  
みちるは、他の三人に比べ、やや幼  
い出で立ち。小脇には、ピアノの本  
を抱えている。

みちる　ごめーん。ごめんなあ、遅くなって。

彩　遅いよー。

詩織　久しぶり。

みちる　久しぶり、って詩織ちゃん。

詩織　何？

みちる　ややなあ、こないだ会おうてるやん。

どうしたん？　化粧なんかして。

詩織　：：え：：？

みちる　彩ちゃんもなんか今日、大人の雰囲気  
気漂ってるで。

彩　そう？

みちる　（辺りを見回し）あれ？　亮子は？

彩　今、マン・ハントに行ってる。

みちる　え？

詩織 あ、ジュース買いに行ってる。

みちる そっか：：。

彩と詩織は、何とはなしにみちるの  
様子をうかがっている。

みちる ：：何？

詩織 榎本さん、やんな？

みちる うん。なんで？

詩織 いや、変われへんなあって思おもて。

みちる そんな変われへんよ、急に。あ、ご  
めん。私、ちよつと行かなアカンねん。

彩 何処に？

みちる そこ。

と、ステージの方を指さすみちる。  
そこは、大きな幕で仕切られている。

詩織 ステージ？

みちる うん。

彩 何すんの？

みちる 音楽教室。もうすぐピアノの発表会  
やんか。

彩 え？

詩織 あ、そうなん？

みちる いややなあ、こないだ言うたやん。

彩 (詩織を見て) そうだっけ？

詩織 (みちるに合わせて) うん、：：聞いて  
たかも。

みちる ちよっと先生厳しくてな、練習して  
なかったら弾いてる手え、パシンって叩き  
はんねん。そやから練習してたら遅なって  
しもた。

詩織 そっか：：。まだ続けてるんや、ピア  
ノ。

みちる まだ始めたばかりかしやって。あ、ご  
めん、ちよっと行って来るわ。先生、時間  
にも厳しいねん。

と、行きかけるみちる。



詩織 榎本さん。

みちる (立ち止まり) 何？

詩織 また帰って来る？

みちる うん、音楽教室終わったら来るわ、  
すぐに。

と、みちるは、去る。

みちるの姿が見えなくなってから、

彩 ねえ、詩織。

詩織 ん？

彩 今の子。

詩織 榎本さん？

彩 榎本って言うんだっけ？

詩織 うん。

彩 下の名前、なんだっけ？

詩織 榎本：：、うーん：：、なんやったか  
なあ。私、いっつも名字で呼んでたし。

彩 その名字ってのが呼びにくくってさあ。

詩織 そう？ 名字の方が呼びやすいで。

ステージの方から、拙いピアノで、  
ベートーベンの「トルコ行進曲」が  
聞こえて来る。

詩織 : 「トルコ行進曲」や。

彩 よく知ってんねえ。

詩織 : うん。

ピアノに聞き入っている詩織。

彩 どうしたの。

詩織 そう言えばあの頃、榎本さん、よう弾  
いてたわ。リビングにあったピアノでこの  
曲。

彩 リビングってあの三階の？

詩織 二階ちゃうかったっけ？

彩 そうだっけ。

詩織 分かん。

彩 あそこりビングって言うよりは何か物置  
って感じだったよね。テーブルやギターや  
パソコンなんかゴチャゴチャあつてさ。

詩織 今日は「ゲーム大会や」とか言うてみ  
んなでテーブル囲んで。

彩 トランプだっけ？

詩織 ちゃうよ、「人生ゲーム」。

彩 知らない、そんなの。

詩織 小磯さんもやってたで、確か。

彩 知らないって。トランプの大富豪大会は  
覚えてるけど。

詩織 でもなあ……。

彩 何？

詩織 全然上手くなってへんような気がす  
る。

彩 トランプ？

詩織 ううん、榎本さんのピアノ。

彩 でもさ、あれから、えーっと……、何年  
だっけ？

詩織 うーんと……、（数えながら）六年。

彩 六年経ってんのに？

詩織 そう。

彩 きつとまた最近始めたんじゃない、えつと、榎本……、なんだっけ？

詩織 榎本さん。

彩 下の名前、思い出してよ。

詩織 分からなくて、そんなん。エエやん、名字で。

彩 向こうってさ、ファースト・ネーム・ベースじゃん。なんか呼べないのよね、名字って。

詩織 それって何？

彩 え？

詩織 ファースト・なんちゃらって。

彩 ああ、ファースト・ネーム・ベース。

向こうの社会では下の名前で呼び合うのが普通なの。

詩織 友達同士で？

彩 ううん、年下の人でも先輩でもなんでも。

詩織 そうなん？

彩 うん。

詩織 ほな私、生まれへんわ、アメリカ。

彩 なんで？

詩織 苦手やねん、下の名前で呼ぶの。

彩 変なのー。どうして？

詩織 うーん、なんでやる……。なんか自分の中で戸惑ってしまっねん。呼び始めるタイミングとか、新しい呼び方に慣れるまでの歯痒さとか、いろいろ。

彩 へえー、そうなんだ。

詩織 だから羨ましいなって思うよ、小磯さんなんか。誰の事も下の名前で呼べて親しそうでエエなあって。

彩 そんな事考えて呼んでないって。

詩織 ……：：そうなん？

彩 親しくても親しくなくてもこうゆう呼び方しか出来ないだけ。

詩織 でも呼ばれた本人はちやうと思うで。

あ、この人、私の事、仲いいって思おもてくれてるって安心するし。

彩 仲いい？

詩織 うん。だって距離あるやん、名字で呼んでたり、ですますでいつまでも喋ってた  
ら。

彩 下の名前で呼んでも距離はあるって。

自分の中に。

詩織 ……ほんま？

彩 うん。だって私、あそこで親しい人なんて居なかったもん。

詩織 え……。

と、彩を見る詩織。

彩 何？

詩織 いや、親しそうな人、いっぱい居おるよ  
うに見えたから。

彩 居ない居ない。詩織は？ 居た訳？

詩織 ……。

彩 どう？

詩織 ……分かれへん。

彩 そんなもんだって。

詩織 なあ、小磯さん：：。

彩 ん？

詩織 なんでそんなに割り切れるの？

彩 割り切ってる？ 私。

詩織 割り切ってるよ。

彩 そう？

詩織 だって親しい人居ないって認めたくないやん、普通。

彩 そうかなあ。

詩織 だって色んな思い抱えてみんなあそこ行っただんやし。

彩 別に私は無いよ、色んな思いなんて。

詩織 じゃあ、なんで小磯さん、あそこ行っただん？ 誰かと仲良くしたいって思<sup>おも</sup>ったんちゃうん？

彩 無い無い、そんなの。自分のしたい勉強が出来ると聞いて聞いたから行っただけ。

詩織 そんなん学校でも出来るやん。何かあったから学校行けへんようになったんちゃう

うん？　　そんであそこに来たんちゃうん？

彩の顔が、少し強張る。

彩　：　何も無いよ。

詩織　何も無かったら来るはずないやん。

彩　何も無いよ。詩織が期待してるみたいな、いじめとかウジウジした悩みなんか、一つも。

詩織　：　期待なんかしてへんよ。

彩、詩織を真正面から見て、

彩　向こうに居た時、そりゃ家では日本語喋ってたよ、親とは。でも読み書きは全然出来なかった訳。そんな子供が中学でこっちに帰って来ました。どうなると思う？

詩織　知らん、そんなん。

彩　読み書き出来ないからって“なかよし学級”に入れられた。オツムが足りなくてま



ともに会話も出来ないような子と一緒に机並べられてさ。向こうではみんなと楽しくやってたのによ。なんか格付けされたみたいで学校なんて行きたくもなくなるじゃん、そんなの。

詩織 ……そう。

彩 詩織達とは違うのよ、不登校の理由が。

詩織 ……。

互いに、口を噤んでいる二人……。

そこに、江藤由実子が、やって来た。

由実子は、防寒服で身を固め、大き

なりユツクを背負っている。手には、

一枚の地図。

由実子、彩に向かって、

由実子 あのお、すいません。

彩 ……。

顔を背ける彩。

由実子、詩織に近付き、

由実子 すいませーん。

詩織 はい。

由実子 （地図を見せながら）これって、ここですかねえ。

詩織 （地図を覗き込み）えーっと、そうですね、ここです。

由実子 あー、良かった。日が暮れる前に着いて。

詩織 はあ。

由実子 私、東京から来たんです、じつとしてられなくて。あ、東京って言っても23区じゃないんですよ。ほとんど神奈川に近いんですけどね。だから“一応”の東京都民です。ほんとの度は大変でしたよねえ。

詩織 え。

由実子 私、持てるだけの物持って来ましたから使ってください。えーっと。

と、リュックの中の物を取り出す由実子。

おにぎりと缶ジュースを詩織に渡し、

由実子 はい。これ、食べてください。

詩織 え？ 結構です。

と、由実子に返す詩織。

由実子、さらに押し返し、

由実子 そんな遠慮しないで。困った時はお互い様じゃないですか。

詩織 でも、頂く理由が、

由実子 (遮って) 理由なんていいんですって。(彩にもおにぎり缶ジュースを渡し) はい、あなたも。これ食べて元気出して。

彩 ああ……、はい。

由実子 なんでも私に言ってくださいね。私、皆さんの力になるように頑張りますから！

彩・詩織

：：：：。

ただ、由実子を見つめる彩と詩織。  
拙いベートーベンの「トルコ行進曲」  
が、聞こえていた。

2・午後五時

「あぶくたった」をする歌声が聞こえている。

彩が中央に入り、詩織、亮子、由実子の三人が、手をつないで周りを回っている。

彩 トントントン。

詩織・亮子・由実子 何の音？

彩 風の音。

詩織・亮子・由実子 あー、良かった。

彩 トントントン。

詩織・亮子・由実子 何の音？

彩 木の枝が窓に当たった音。

詩織・亮子・由実子 あー、良かった。

彩 トントントン。

詩織・亮子・由実子 何の音？

彩 おぼけの音。

詩織・亮子・由実子 キャー。

と、詩織、亮子、由実子は、逃げる。

その三人を彩が走って追い掛ける。

そして、乱暴に由実子を掴まえる彩。

四人、息を切らしながら、

彩 もう一回しよ。

亮子 ちよつと休憩しようや。

彩 ダーメ！ こういうのはノリノリでする

から面白いって言ったの亮子でしよ。

亮子 そやけど彩ちゃん、なんかおかしいで。

彩 おかしくないよ、ちゃんと自分のオリジ  
ナルでやってるし。

亮子　ちやうよ、なんか取り憑かれたみたい  
にずーっとこればっかしやってるやん。

彩　（少しふてくされぎみに）だって面白い  
んだもん。

亮子　面白いようには見えへんけどなあ。

彩　面白いよ！

その場の雰囲気、由実子が慌てて、

由実子　「あぶくたった」ってなんでしよ  
うね。

詩織　え？

由実子　あ、何があぶくたったのかなあって。

詩織　ほんまですねえ。

亮子　小豆を煮てるんやて。

由実子　ああ、小豆。

亮子　（右側で二回手を叩き）「お砂糖ど  
んどん」、（左側で二回手を叩き）「お塩をど  
んどん」、とか言うやり方もあんねんて。

詩織　へえー、あんこを作ってるんや。

由実子 煮てる間に固い小豆マメが甘くて柔らかいあんこになるんですね。

亮子 初めにあった物とは全く違う物が作られるって訳やな。時間をかけて煮ると。

由実子 あんこから誰もあの豆は想像出来ないですよ。

詩織 ほな、あぶくが変身の元やな。

由実子 あぶく？

詩織 うん、あぶくが時間と一緒に何かを連れ去ってしまうんやわ。

亮子 あぶくは、ただのあぶくやろ。

詩織 だってあんこは自分が固くて小さい小豆マメやった事なんか忘れてるよ。初めっから甘くて美味しいあんこやったって思ってるわ、きつと。

由実子 で、たまに「トントントン」「何の音？」って過去の記憶が呼び起こされたりする訳ですね。

亮子 過去の記憶？

由実子 はい。私はほんとは何だったんだろ

う、何を思ってたんだろう、って振り返って。

亮子 ああ！ そうかもな。

彩 とかなんとか言って強引に持ってって  
でしよ。

亮子 何。

彩 休憩に。

亮子 ばれてた？ （由実子に）休憩したい  
ですよねえ。

由実子 私は別にいいですよ。皆さんのなさ  
りたいたいようにしてください。それに従いま  
すから。

亮子 （詩織に）休憩したいよな。

詩織 ちよっと続けてやってるしなあ。

亮子 はい、多数決。ほな休憩。

と、亮子は、さっさと腰を下ろす。

亮子 はあー、しんど。

彩 ああーあ。私、煙草吸いたいな。



詩織　ここ禁煙やで、確か。

彩　いいじゃん、他に誰も居ないんだし。

と、鞆の中を探す彩。

彩　（探しながら）あれー、忘れて来たのか  
なあ、煙草。

詩織　吸うなってゆう事や。

彩　（由実子に）買って来てもらえます？

由実子　はい？

彩　煙草。

由実子　（気持ちよく）いいですよ。

詩織　小磯さん。

彩　何。

亮子　さつきホットのコーヒーが飲みたいっ  
て行ってもろたところやん。

由実子　いいですよ、行きますよ。

彩　ですよね、せっかく東京からみえてるん  
だし。

由実子　はい、皆さんのお役に立てるなら。

彩 あ、お金出しといてくださいね。

由実子 はい。

と、自分のリュックの方に行く由実子。

亮子 （由実子に）いいですって。外、もう暗くらな  
なって来たし迷子になりますよ。

由実子 私は構いませんよ、ほんとに。

詩織 煙草の自販機なんか何処にあるん？

彩 知らない。

詩織 そんな知らん事、頼まんでも。

由実子 （地図と懐中電灯を出し）探します

よ、ほら地図も懐中電灯もあるし。

詩織 地図に自販機なんか載ってるんです  
か？

由実子 ジョークですよ、ジョーク。

と、財布をポケットに入れながら、  
出掛けようとする由実子。

亮子 （由実子連れ戻し）ほんまに居おって  
ください。それでなくても最近の自販機、  
人選ぶから。

詩織 そうなん？

亮子 そうや。“私、新しい五百円玉しかイ  
ヤ！”とか“私は古い五百円玉しかダメ！”  
”とかな。

由実子 新しい五百円玉？

亮子 そう。我が儘やねん。

由実子 そんなのあるんですか？

亮子 ありますよ、そんな自販機ばかり。

由実子 だからさっきもそうだったんだ。

亮子 やっぱそうでした？

由実子 はい、コーヒー買いに行った時、何  
回五百円玉入れても戻って来て。お金も大  
きいのしか無かったから両替するのにお店  
探したんです。でもこの辺ってお店とか無  
いんですねえ。

詩織 そんなで時間かかったんや。

由実子　でもホツとしました。ここは聞いて  
たより被害もそんなに無いみたいだし、も  
っと大変かと思ってたから。

詩織　被害？

由実子　あ、煙草買いに行つて来ますね。

彩　もう、いいです。

由実子　え、行きますよ、私。

彩　いいんですよ。もう暗いし、ここ禁煙だ  
し！

由実子　：：そうですか。

と、地図や財布をリュックに戻しに  
行く由実子。

詩織　あ、そうや、泊さん。

亮子　何？

詩織　さっきあの人、来てたで。榎本さん。

亮子　：：え。

詩織　（ステージを指し）音楽教室やねんで、  
今。終わったらまた来るって。

亮子　：　：。

彩　その割にピアノの音聞こえないよね。

詩織　うん。遅いなあ。

亮子　：　：嘘や、そんなん：　：。

亮子の顔が、強張っている。

詩織　ほんまやん、(彩に)なあ。

彩　うん。ねえ、あの子、榎本なんて言うん

だっけ？

亮子　え？

彩　下の名前。

亮子　みちる。

詩織　あー、そうや。

彩　みちるかあ。

亮子　なあ。

彩　何。

亮子　ほんまにみちる来たん？

彩　うん。

亮子　ほんまにみちる、また来るって言うた

ん？

彩 ほんとよ。

亮子 ほんまにほんま？

詩織 しつこいで、泊さん。

亮子 嘘や、そんなん。

彩 なんでそんな事で嘘つくのよ。

亮子 人違いって事もあるやろ。

詩織 間違うはずないやん。榎本さん、いつ

こも変わってへんもん。

亮子 ：： そうなん？

詩織 うん。あの頃のまんまやで、髪型も服

装も。化粧もしてへんし。

亮子 ：： みちる、元気なん？

彩 元気も元気。さっきまで下手なピアノ弾

いてたよ。

詩織 下手って、小磯さん。

彩 だって事実でしょ。詩織も言ってたじゃ

ん、下手くそって。

詩織 そんな直接は言うてないよ。

彩 一緒一緒。

亮子　：　：　：　：　。

亮子の顔に、だんだんと笑みが戻って来る。

亮子　なあーんや。

彩　どうしたの？

亮子　（更に大きな声で）なあーんや！

と、亮子は、笑い出す。

彩　大丈夫？

亮子　はははは：　：　。

詩織　どないしたん。

亮子　（詩織に）元気やったんや、みちる。

詩織　元気やって言うてるやん。

亮子　そっかあー！

と、亮子は、詩織の手を持って回り始める。

詩織　ちよっと待ってよ、泊さん。おかしいで。

亮子　ははは：：。

由実子　（彩に）どうしたんですか？

彩　さあ。

亮子　（回りながら）なあーんや、アホらしいー！

詩織、亮子の手を振りほどき、

詩織　どっちがアホらしいの。

亮子　なあんや！

由実子　（彩に）皆さん、仲いいんですね。

彩　（素知らぬ顔で）そうですねえ。

亮子　あ、そうや。（由実子に）お名前聞いてませんでしたよね。

由実子　あ、すみません。江藤由実子つて言います。



亮子は、まだ興奮冷めぬ様子で、

亮子 泊亮子です。

由実子 泊さん。

詩織 三宅詩織です。

由実子 三宅さん。

彩 。。。。

由実子 (彩に) あの、お名前教えてもらえますか？

彩 彩です。

由実子 彩さん。

彩 。。。。

由実子 皆さん、何かのサークルですか？

亮子 はずれー。

由実子 え、じゃあ、なんだろ。

詩織 私ら、六年ぶりなんです。久しぶりに集まろうって。

由実子 へえー。

亮子 そんなエエもんちやうやん。

詩織 だってそうやん。同窓会みたいなもん

やろ？

彩 同窓会？

亮子 ただのバイトやん。

詩織 バイト？

亮子 (由実子に) バイトですよ、リサーチ  
たらなんたら。

詩織 なんで？

亮子 なんでって言うてもそうやんか。

彩 違うよ。

亮子 じゃあ、何？

彩 だから言ったでしょ。日本の伝承遊びを  
教えてくれるって言うから来たって。

亮子 それマジやったん？

彩 マジに決まってるじゃん。仕事にも役に  
立つからってさあ。

由実子 お仕事何されてるんですか？

彩 子供に英会話教えてるんです。アメリカ  
の遊びとか取り入れながら。

詩織、彩を見て、

詩織 小磯さん、結構真面目にやってるやん。

彩 一応は両方の文化知つとかないとね。

詩織 でもおかしいなあ。

彩 おかしくないよ。

詩織 じゃなくてな、私は久しぶりやから集まって遊ぼうって聞いたで。

亮子 誰に？

詩織 「わかば」に通ってた者です」って言うてた、電話で。

亮子 だから誰よ。

詩織 うーん、名前は忘れた。だってあそこ、たまにしか来<sup>け</sup>えへん人も入れたら三、四十人は居<sup>お</sup>ったし。

亮子 そんなん嘘や。

詩織 ほんまよ。

亮子 だってウチはバイトやで。

彩 何の？

亮子 確かなあ、小さい頃、集団遊びを経験してない子供達が成人してどうゆうふう

なるか、とか、その子らがそうゆう遊びに  
どう対応するか、みたいなりサーチやった  
と思う。

詩織 誰が主催してんの？

亮子 知らんよ。ウチ、バイトの登録してた  
だけやもん。

彩 だから意地になってやってたんだ。

亮子 何を。

彩 つまんない遊び。

亮子 そりゃバイト代減ったら困るからな。

彩 けどなんでこのメンバーなのよ。

亮子 そりゃただの共通項やろ？ 集団遊び  
を経験してないって言う。

彩 だから私はそんなバイトじゃないって。

由実子 すごい。

詩織 何がですか？

由実子 だってすごいじゃないですか。お互  
い違う理由でたまたま集まるなんて。

詩織 たまたま：：？

由実子 すごい偶然が重なったんですねえ。

亮子　これって偶然なん？

由実子　偶然でしょう。

彩　：：偶然なの？

と、顔を見合わせる亮子、詩織、彩。

由実子、気配を察して、話題を変え

ようと、

由実子　あのお。

詩織　はい。

由実子　「わかば」って皆さんの集まりの名

前ですか？

詩織　どうして知ってるんですか、そんな事。

由実子　やだ、やだなあ。三宅さんがさつき

言ってたじゃないですか。「わかば」って。

詩織　：：ああ。

由実子　どうゆう所なんですか？

詩織　：：：。

誰も、口を開かない。

気まずい時間が、流れる。

由実子 あ：：、ごめんなさい。私、変な事  
聞いたかも知れませんか。

詩織・彩・亮子 ……。

由実子 ……すいません。

間。

由実子 私、東京ではね、

亮子 (遮って)「わかばの窓」って言うん  
です。

由実子 「わかばの窓」……？

亮子 はい。

詩織 泊さん、そんな事この人に言わんでも。

亮子 エエやん、ほんまの事やねんから。

詩織 でも関係ない人にまで言う必要ないや  
ん。

彩 いいんじゃないの。

詩織 小磯さんまで。

彩 詩織だって一応は乗り越えたから今日ここに来たんじゃないの？

詩織 それは：：。

彩 じゃなきゃ来れないでしょ、普通。わかばでよく使ってた体育館なんか。それとも何？ まだお互いの傷を舐め合いたくて来たとか？

詩織 やめてよ、そんな言い方。

彩 じゃあ、いいじゃん。

詩織 でも知らん人に言うたらそうゆう目で見はるやん。この子は弱い子やねんなあとか、ひどい時なんか精神の病気やって言われたわ。

彩 言いたいヤツには言わせときゃいいの。

詩織 私、小磯さんみたいに割り切られへんもん。そんな強くないもん！

由実子は、慌てて、

由実子 ごめんなさい、もう、いいですから。

(詩織に) ごめんなさいね、要らない事聞  
いて。本当にごめんなさい。私、皆さんの  
お役に立ちたくて来ただけなんです。

詩織 ……。

亮子 詩織ちゃん。

詩織 ……。

亮子 詩織ちゃんてば。

詩織 ……。

亮子 重いで。

詩織 何が思い出よ。

亮子 え？

詩織 そんなエエ思い出ちやうやか。

亮子 は？

詩織 は？ って何よ！ なんであれが思い

出なんよ！

亮子は、笑い出す。

彩も、釣られて笑い出す。

詩織は、泣きそうな顔になる。



詩織 何よ、もおー。何笑ってんのよ。

亮子 (笑いながら) だって、詩織ちゃん。

詩織 何。

亮子 思い出とちゃうって。思い出と。

詩織 だって言うたやんか。

亮子 言うてない、言うてない。

彩 おつかしいー。詩織ったら聞き違えて。

詩織 え：：。

亮子 うん。

詩織 ：：聞き違い？

亮子 そ。重たい。重い。重いで。の重いで。

詩織 ：：重たい：：て言うたん？

亮子 そうやん。

詩織 重いで、って言うたん？

亮子 そうやってば。

詩織 そうなんや：：。

と、詩織も、少しずつ笑い始める。

三人、ひとしきり笑った後で、

彩 詩織。

詩織 ん。

彩 笑い話だつて。

詩織 : : 笑い話。

彩 そ。なんでも笑い話。

詩織 : : うん。

亮子 そんなもんや。

詩織 そんなもんか。

由実子 ごめんなさいね、私が口挟んだばっ

かりに。

亮子 そんな謝りなや。(詩織に)なあ。

詩織 うん : : 。

由実子 (詩織に)ごめんなさい。

詩織、心を決めたように、

詩織 (由実子に) : : あのかな、三階建ての

小さいビル。不登校の子供達が集まるフリー・スクールなんです。「わかばの窓」つて。

由実子　：：はあ。

詩織　六才から二十才位まで三、四十人は登録してました。

由実子　：：はい。あの：：、聞いてもいいですか？

詩織　どうぞ。

由実子　この近くにあるんですか？

彩　でも潰れましたよ、震災で。

由実子　：：そうなんですか。

亮子　（由実子に）そんな顔しないでくださいよ。

由実子　え：：。私、変な顔してました？

亮子　変じゃないけど、気の毒やなあ：：、て顔してる。

由実子　ほんとに、心の底からほんとに気の毒って思ってるんです。

亮子　思わなくていいで。

由実子　：：どうして？

亮子　そんなん思うの一時いっときの事やから。過ぎてしまえば無いのと同じ。

由実子　でも私はね、一生忘れないし、忘れたくないんです。今の世の中、こんな事が起こるなんて誰も想像出来なかったじゃないですか。すごいショックでした。東京の離れた土地で気を揉んでる位なら、何か私にも手伝える事があるかも知れないって、それで飛んで来たんです。

彩　そんなに気張らないでよ。ね。

由実子　：：はあ。

詩織　でも不思議な体験やったよなあ、あれも。

亮子　うん。何か映画観てるみたいやったな。作り物の嘘っぱちの世界。その中にエキストラで出てる感じ。出演料はただや。でもエエねん、おもしろいから。

彩　一つのお祭り、イベントだったのよ。日本中集まってワッショイワッショイってさ。過ぎてしまおうとガラーンって空からっぽになつてね。

詩織　そんな事言うの止めやようや。亡くなっ

た人もたくさん居いはんにの。

亮子　そやけど知らん人死んでも自分の生活に変化無いやん。

詩織　それはそうやけどな……。

亮子　家無くした。身近な誰かが死んだ。だから好きな事言ってもいい。そうでない人は安易な事は言われへん。そんなんおかしいやん。それってただの踏み絵ちゃうん？  
ただの免罪符や。

彩　そうそう。言葉ってそんな物もんよ。何がほんどでも、たとえそれが嘘であつても踏み絵は出した者もん勝ち。出してしまえば何だつて言っているの。「私の知ってる人がね」とか「聞いた話だけどね」じゃダメなのよ。三等親以内の現実感が無いと。だけど私達だつてさあ、もう言いたい事言ってもいいのよ。こんだけ経へつてるんだから。

亮子　（彩に）結構難しい熟語知ってるやん。

彩　これ位は知ってるよ。わかばで中学ん時に教わったからね、小学校の社会。

詩織　でも私はそんなん納得出来へんわ。面  
白いなんて絶対言うたらアカン事や。

亮子　詩織ちゃん、知ってる人で誰か死ん  
だ？

詩織　うん。：：小さい時に隣りに住んでた  
おばさんとか、小学校の同級生とか。

亮子　ほな、それ知って涙出た？

詩織　：：：。

亮子　どない？

詩織　：：出えへんかった。

亮子　やろ？　そんなもんやん。

詩織　私な：：、涙、搾り出そうとした。そ  
うせな悪いような気がして。うせなアカ  
ンような気がして：：。でも出えへん。困  
った。私はイヤな子やって思っただけが残っ  
た：：：。

彩　詩織。

詩織　：：ん。

彩　わかばでさあ、いっつも言われてた事、  
覚えてる？

詩織 ……何やっけ。

彩 自己肯定感を持って。

詩織 ……自己肯定感。

彩 私、これだけはハッキリ覚えてるのよね。

自分を肯定する力を持って。

亮子 ああー、そう言えばよお言うてたよなあ。自分を否定せず、肯定するようになって。それが出来たらあそこに行つてないっちゅうねん。

彩 あそこに居るって事自体、自分を責めるのには十分だったからね。“私は学校へも行けないダメな子です”ってさ。しようがないよ。

詩織 ……「行きたくない」……、「行かないとアカン」……、「もう行けない」……、「行けない私はどうしようもない子」……。  
亮子 あの頃、……ちよつとしんどかったよな……。

彩 ……ちよつとね……。

と、三人の顔が曇る。

詩織　そやから私、迷ってん。このメンバーに会<sup>お</sup>うたらあの頃の感情が湧いて来るの分かってたから。忘れかけてたイヤな感情が具体的に。

亮子　ウチは会うつもりで来てないで。たまたまや。

彩　私も。

詩織　でも結果的には会うてるやん。

亮子　まあな。：：普段はきれいに忘れてるのになあ、大雑把な事も細かい事も全部。それやのに誰か似てる人に会<sup>お</sup>うたり、何かあった場所通ったりしたらグワーツて甦って来るよな。すごい細部に渡ってまで。

詩織　結局、自分の中には残ってるんよ。忘れたって思い込んでただけや。

と、詩織は、溜息を吐<sup>っ</sup>く。

亮子、詩織、彩の顔が、暗くなる：



：

が、亮子は、それを打ち消すように、  
フツと笑い、

亮子 学校の保健室でも逃げ場のある子が羨  
ましかったわ。ウチなんか三畳の自分の部  
屋だけやったもん。親も相手にならへんし。  
彩 私はさ、男だったら良かったのにつてよ  
く思ったよ。家中の物ひっくり返して、壁  
蹴って、穴ぼこ作って、親の顔に青タン作  
ってやれたらどんなにスッキリするかって。  
それだけで周りビビるじゃん。

亮子 ビビる、ビビる。

彩 踏み絵よね、それも。ビビらした者勝ち<sup>もん</sup>。  
相手さえビビらしときゃ何だって出来るの。  
：：でも女だからって周りがなんとか説得  
しようとしてさあ。

詩織 ……私はな。

彩 んん？

詩織 私は得意技持っててん。女でも周りビ

ビラス技。

彩　　どんな？

詩織　聞きたい？

彩　聞きたい聞きたい。

詩織　ケイレン。究極の状況になったらバタ  
ーンって倒れてヒクヒクヒク……って。

亮子　生まれつきちゃうん？　ケイレンっ  
て。

詩織　ちゃうよ。中学入ってからやもん、ケ  
イレン起こすようになったん。正確にはい  
じめられるようになってからや。

彩　それって引くよね、周りの人。

詩織　引く引く。

亮子　そんで体もヒクヒク……って？

詩織・彩　……。

覚めた目で、亮子を見る詩織と彩。

亮子　つまらんかった？

詩織　つまらんつまらん。

彩 でもいいなあ、そんな得意技持ってた。  
詩織 こっちは真剣やってんで。でもビツク  
リする周りにザマアミロとも思おもってたな。

亮子 切り札かあ。このケイレンが目に入らぬかあ！ って。

詩織 泊さん、好きやなあ。水戸黄門とか桜吹雪とか。

亮子 うん、あれって結末いつも一緒やろ？  
安心して観てられるもん。

彩 年寄りくさあ。

亮子 くさないわ。

彩 くさいよ。臭う臭う。

亮子 えーい、くつついてやるー。

と、彩に擦り寄って行く亮子。

彩 止やめてくれー、気持ち悪い。

亮子 くさいの移してやるうー。

彩 寄るな、寄るな。

その途端、由実子が顔を覆ってしゃがみ込む。

それにいち早く気付いた詩織は、

詩織　　どないしたん？　江藤さん。

と、由実子に近寄る。

由実子は、ただ顔を覆っている。

由実子　　：：：。

亮子　　どうしたん？

と、亮子も近寄って行く。

彩は、そっぽを向いて、

彩　　疲れが出たんじゃないの？　東京から来た。

由実子　　：：違う、違うんです：：。

由実子は、泣いていた。

由実子 私、どうしてここに来たんだろって、  
分からなくなってきたんです。：：皆さん  
の話聞いてたら、私に、：：私になんか、  
何も出来ないって思えて来て：：。私、何  
をしようって思ってたのか、何が出来るの  
か：：：。

と、泣く由実子。

詩織、彩、亮子は、顔を見合わせて  
戸惑っている：：。

詩織 (亮子に小声で)：：感情失禁。

亮子 え？ 何それ。

詩織 感情の抑制が取れて自分でもコントロ  
ールが効かなくなるねん。職場の患者さん  
でも時々ある。

彩 なんで？

詩織 さあ：：。何かこの人の感情を揺り動  
かすような出来事があったんやろな、最近。

初めっからテンション高かったし。

亮子・彩　へえ……。

その時、みちるが、やってきた。心  
なしか、足取りが重い。

みちる　ごめんな、遅くなつて……。

彩　遅い遅い。

みちる　ごめんって。……先生にちよつと怒  
られてへこんでてん。こんなんじや発表会  
出られへんって。

詩織　そうなんや。

みちる　あの先生、ズバズバ言うんよなあ。

彩　いつからやってるの、ピアノ。

みちる　え、知ってるやん。

彩　……え。

みちる　彩ちゃんやんか。

彩　何が。

みちる　彩ちゃんやで、思い切ってピアノ習  
ったら？　って言うてくれたん。

彩 ……そうだったけ。

みちる そうや。ここでわかばのみんなでバレーボールした時やん。(フロアーを指し) こっちでボールの音がしてて、(ステージを指し) そっちで音楽教室やってて、ポロンポロンってピアノの音が聞こえててな。「エエなあ」って私が言うたら、「みちる、ピアノ好きだから習ってみたら」って言うてくれたやん。

彩 それ、私じゃないよ。他の人でしょ。あ、詩織とか。

詩織 私？

みちる ちゃうよ、彩ちゃんやって。

彩 そうかなあ…。

詩織 小磯さん、ざる策の脳味噌やから。

みちる 何それ。

詩織 すぐ忘れるねん。

彩 お互い様。

みちる そんなん忘れんとってよ。私にとつては恩人やのに。

彩 はいはい、ごめんなさい。

みちる あれ……、（小声で彩に）どないしたん？

と、由実子を見るみちる。

亮子、顔をほころばせて、みちるに  
近寄り、手を取る。

亮子 みちるう！ 久しぶり！

みちる ……え……。亮子？

亮子 うん。ずーっとどうしてるかって気に  
してたんよ、ずーっと。元気やった？

みちる 元気やで。なんか亮子……。

亮子 何？

みちる あ、いや、今日、大人っぽいなあつ  
て……。

亮子 そりゃ少しはそうなるよ。みちるはい  
っことも変われへんなあ。

みちる だから急には変わらんで。それより、  
（由実子を見て、亮子に）どないしたん？



亮子 さあ。

みちる さあ、って（彩に）泣いてるやん。  
彩 知らない。

みちる （詩織に）どないしたん？

詩織 さあ。

みちる 何よ、みんなして“さあ”って。

詩織 だってほんまにそうやねんもん。

みちる みんなで弱い者いじめしたん？

詩織 してないよ。

みちる でも理由も無しに泣くはずないや  
ん。

亮子 みちるまでアイツみたいな事言う。

みちる 誰？ アイツって。

詩織 さっき来たの、変なヤツが。「弱い者

いじめすんなや」って突然。

亮子 （詩織に）変なヤツちやうよ。

詩織 変やって。

亮子 変ちやうよ。

その時、由実子が立ち上がり、

由実子 私、顔洗って来ます。

みちる (由実子の顔を見て) え……。 (周りに) 誰、この人？

亮子 今日、東京から来はってんて。

詩織 江藤さん。

由実子 : : すいません、こんな顔で。

みちる : : 東京の、江藤さん : : て？

詩織 あ、わかばの人ちやうで。

亮子 ウチらも今日会<sup>お</sup>うたばっかしやし。

彩 何かお手伝いがしたいんだって。

みちる お手伝い？

由実子 はい。 : : すいません。

と、由実子は、行こうとする。

亮子 あ、洗面所、そっち出て右の奥やで。

詩織 え？ 出て左でしょ。

亮子 右の奥ちやうかった？

みちる そっちは今使われへんねん。(反対

の方を指し）そこ出て渡り廊下降りたところにあるわ。

由実子 はい。

と、リュックからタオルを出し、行きかける由実子。

彩、由実子に向かって、

彩 ちょっと、江藤さん。

由実子 はい。

彩 （関西弁で）人ってな、しんどい時、“助けて！”ってオーラが滲み出て来んねん。他の人を引き寄せようとしてな。そやけど迂闊に近寄ったら自分も溺れてまうで。助けられるなんて思ったら大間違いや。一緒に溺れ死ぬだけ。その覚悟が無かったら近寄らんとき。人に何かしてやれる力なんか人間持ってないんやからな。

由実子 ……はい……。

と、由実子は、足早に去る。

亮子、詩織、みちるの三人は、呆気に取られて彩を見ている。

彩 （元に戻り）：：何よ。

詩織 迫力あんなあ。

彩 何が。

詩織 小磯さんの関西弁。

亮子 関西弁喋れるんや。

みちる 初めて聞いた。

彩 そ、そりゃ喋れるよ、関西弁くらい。いくら親が関東育ちだからって、私は関西の方が長いんだしさあ。

詩織 へえー、知らなかった。

亮子 彩ちゃんてな、一人標準語使<sup>て</sup>てウチらの事、小馬鹿にしてるように見えるよな。

詩織 そう言えば見えたなあ。

亮子 中学の時からパーマかけてたし。

彩 かけてないよ、パーマなんか。

亮子 うそー、こう、（髪の毛を丸め）クリ

クリッとしてたやん。

彩 してないって。ずっとストレートだった。

詩織 髪の毛、染めてただけやんな。

彩 染めてないって。

詩織 うそー。茶色やったやん。

みちる 黒くてショートやんな、ずっと。

彩 そうよ。

詩織 そうやっけ。

彩 そう！

詩織 ：：そうか。

亮子 なあなあ、彩ちゃん、ここに救急車も呼んだやろ。バレーボールやった時、誰かとぶつかってひっくり返って。

みちる またそんな事言う。

彩 私じゃないよ。

みちる あれ、バスケットやん。

亮子 バスケか。でも彩ちゃんやで。

みちる 亮子っていつも茶化すんやから。

詩織 あれ男の子やろ。

亮子 女の子や。だってウチあん時、初めて

救急車乗ってんもん。

彩　なんだ、自分の話じゃん。

亮子　ちゃうちゃう。ウチは付添や、ただの。  
みちる　病院行ったら軽い脳震盪しんとうやって言われて恥ずかしかったわ、大騒ぎやったし。  
あの後、亮子、家まで送ってくれたやん。

亮子　え？

みちる　リーダーさんが送るって言うたのに私が送るって言うてくれて。なんか心細かったし、めっちゃ嬉しかったわ。

彩　……みちるかあ。

亮子　そうやっけ？

みちる　そうや。あれがきっかけでよう喋るようになったやろ、私ら。

亮子　忘れてたわ。

みちる　よお言うわ。

亮子　ああー、そうやそうや。

と、亮子は、何かを思い出した様子。

みちる 思い出した？

亮子 うん。あん時、バタバタって救急隊の人らが入って来てな、みんなここに人が丸く集まっててん。(フロアーの反対側を指し) そっちでバレエボールしてたおばちゃんらも、(ステージを指し) 音楽教室の人らもみんな。ウチは黒いピアノに置きっ放しの白い楽譜が風でめくれるの見た。ペラペラペラペラ：：って。それは覚えてるわ。

みちる ふーん。

と、みちるは面白くなさそうに、三人から離れて体育館の中をブラブラと歩き始める。

彩 そう言えば前は開あいてたよね、(ステージを指し) その幕。

亮子 ああ：：、そうやな。今日、なんか暗いなあって思おもってたん。

詩織 あん時……、あん時やわ。この幕が下りてるの、初めて見たん。

彩 あん時って？

詩織 ほら、あん時やん。(フロアーを指し)  
こっちは生きてる人が一杯でギユウギユウでな、そっち側は、

亮子 (遮って) 止めようや、縁起でもない。  
気色悪いやんか。

詩織 でも大変やってんで。あちこちで使うから棺桶一つがなかなか無くてな。レスキュー隊やボランティアの人が走り回ってた。棺桶が来るまで(ステージを指し)そっちの人らは毛布にくるまって、

亮子 (遮って) 止めよって。

詩織 なんか紙一重って言うか、ほんま布一枚の差やねんなあ、って思おもたわ。

彩 あの頃、ここでたくさんの方が寝泊まりしてたなんて嘘みたいよね。

詩織 食料も生活用品も一緒くたで山積みやったなあ。寒かったし、みんなボソボソ話



す声に混じってあちこちで咳する音が響いてた。コンコン、ゴホゴホって……。時々、場所取りで怒鳴り合う声も聞こえたなあ。

亮子 詩織ちゃん、来たん？ そんな時、ここに。

詩織 余震がおさまるまで家族と一緒にな。

亮子 へえー、知らなかった。

彩 そりやそうでしょ。あん時以来、無くなっちゃったんだもん、わかばも。

亮子 もうちよつとフオローがあっても良かったのになあ。

詩織 しゃあないよ。公立の学校とちやう訳やし、建物潰れてお金も無いやろし、生徒かて自分の生活で精一杯やったし。

彩 私はちやうど良かったよ。旅立ちの時だなって思ってた。

詩織 小磯さん、割り切り早いしな。

彩 だっていつまでもあそこに居たってしようがないじゃん。

亮子 まあ、ちやうど良かったんかもな。

詩織　ちようど良かった、か……。

その時、みちるが、大きな声を上げる。

みちる　わぁー、ちよつと来てえ。こつちこつち。

と、三人を手招きするみちる。

みちる　早くうー。

彩　なんなの？

亮子　さあ。

三人は、みちるの方へ近寄って行く。

みちる　ほら、見て見て。ここ。

と、みちるは、壁の下の方を指している。

詩織 何？

と、三人もそこに顔を近付けて行く。

彩 ああー！

亮子 何これえ？

みちる な、やっぱりあった。

詩織 やっぱり、つて榎本さん、覚えてたん？

こんな事。

みちる そりゃ覚えてるよ、面白かったもん。

彩 これ、私の字。

みちる あたりまえやん。みんな自分で書いたの。

詩織 覚えてないわ。いつ？

みちる ほら、わかばで球技大会したやん、土曜日やのに珍しくフロアー全部貸し切りで。その待ち時間に書いたやん。

亮子 ああー、そう言えば球技大会やったな

あ、ここで。

彩 うんうん、恥ずかしかったよ。チアガールの格好してポンポン持ってさ。

詩織 私、バドミントンに出たわ。

亮子 朝早くに起きておにぎり作ってな。

彩 暑い時だったよね。

亮子 そうそう。

みちる ……。

三人は、さらに壁に顔を寄せ、それを見ながら、

亮子 亮子、お好み焼き。

詩織 詩織、ハンバーガー。

彩 彩、アイスクリーム。

亮子 みちる、豚まん、やって。

詩織 なんやろ、これ。

彩 好きな食べ物とか？

亮子 (みちるを見て) みちる、豚まん好き

なん？

みちる ……。

みちるの顔が、強張っている。

亮子 みちる？

みちる ……。

亮子 みちるってば。

みちる ……球技大会、待ち時間がやたら長  
かったやん。……私ら四人、ここに並んで  
暇にしてて、今日、帰りに何か食べに行こ  
うって盛り上がって、そんで何食べたいか、  
みんなでここに書いて……。

詩織 そうやったんか。

彩 で、何食べに行ったの？ 結局。

みちる ……。

亮子 なあ、何食べた？

詩織 やっぱりハンバーガーでしょ。

彩 暑かったからアイスクリームだよね。

亮子 なあ、何々？

みちる ……豚まん。

彩 うっそー！

詩織 マクド位、行ったんちやうん。

亮子 行くとしたらお好み焼き屋やで。

彩 ハーゲンダッツでしょ、やつぱり。

みちる 中学生やで。コンビニで買い食いする位しかないやん。

彩 そうかな？

亮子 あの頃も行ってたよ、確か。

みちる わかばで言われてたやん、リーダー

さんが一緒じゃない時はまっすぐ帰れって。

詩織 : : そうか。

みちる それに球技大会は冬やった。ここがラインって寒くて凍<sup>ミ</sup>えそうやったやん。そやから待ってる間、四人でくっついて仕出しの冷たいお弁当食べたんやんか。自分で弁当なんか作ってないねん。チア・ガールかてやったん運動会の時であん時じゃないやんか。球技大会やからバドミントンもやってない。なんで覚えてないんよ、そんな事！

と、みちるは、まくし立てた。

詩織　：：榎本さん。

みちる　何。

詩織　どないしたん。

亮子　そうや、そんな事で怒らんとってよ。

彩　そうよ、人が覚えてる事なんて曖昧なんだから。

みちる　：：曖昧？

彩　だって自分の都合のいいようにしか覚えてないじゃん、みんな。みちるが言った事だって、もしかしたら覚え違いつて事もあるでしょ。誰にも正確な事なんか分かんないんだから、過ぎてしまった事は。

みちる　：：もういいよ。

と、みちるは、三人から離れる。

亮子　みちる。

彩　しばらくほっとこうよ。

亮子 でも：：。

詩織 今日の榎本さん、変やなあ。

彩 そのうちこっちに來るって。

その時、武也が、手に缶ジュースを  
何本も抱えてやって來た。

武也 おーい、來たでー。

三人、武也を振り返り、

詩織 はあ？

彩 何で來んの？

詩織 やっぱり変。

亮子は、ニコニコと武也に手を振っ  
ている。

詩織 （彩をこづき、亮子を見ながら）ほら、  
小磯さん。



彩 （亮子を見て）はあー！？

亮子 （武也に）お疲れさん。

武也 そんなバイト終わって疲れてるヤツに  
奢おごらせるかあ？

亮子 仲間に入る時は要いるんよ、手土産が。

彩 ちよつと仲間って、

武也 みんな招待したがってるって言うから  
な、来たったわ。

彩 誰が言ったの。

武也 （亮子を見て）なあ。

亮子 うん。

詩織 招待って。

亮子 （詩織と彩に）廣田武也さん。

武也 どおも。って、もう会あうてるやないか。

詩織 なあ、泊さん、これって……？

彩 （詩織に）ほーら、私の言った通りだ。

詩織 言った通りって？

彩 言ったじゃん、何か飲み物買って来るっ  
て亮子が行った時さ、きつとコイツに会い  
に行っただって。

詩織 ああー。

武也 コイツって言うかあ。

亮子 (彩に) 廣田くん。

彩 鈍いんだから、詩織って。だいたい飲み物買いに行って手ぶらで帰って来る事自体おかしいでしょ。

武也 (亮子に) おい、もしかして俺に気いあるんかあ？ 用事のついで、つて言うことたやろ。

亮子 買いに行ったで、飲む物<sup>もん</sup>。

武也 ほな、何で手ぶらやねん。

亮子 自販機にウチの五百円玉が振られただけやん。

武也 そうゆう事にしといたろ。

詩織 なんか泊さんって。

亮子 何。

詩織 すごいなあ：：。

亮子 何がすごいんよ。人数多い方が楽しいやろ？

詩織 まあ、：：泊さんがエエんならエエけ

ど。

武也 おい、早<sup>は</sup>よ取ってくれや。熱いんやで、  
結構。氣い効かしてホットにしたんやから  
な。

亮子 あ、どおもどおも。

武也 きついで、このバイト。体の芯から冷  
えきつてもうたわ。

武也から、缶ジュースを受け取る亮  
子。

それを詩織と彩に渡しながら、

亮子 (詩織に) はい。

詩織 (武也に) ……ありがとうございます。

武也 どういたしまして。

亮子 (彩に) はい。

彩 私いいよ。さつきコーヒー飲んだし。

亮子 そう言わんと。

と、彩に、缶ジュースを押しつける

亮子。

そして亮子は、みちるの居る方に駆けって行った。

ちらっと武也を見る彩。

彩　　：　　：。

武也　　どういたしまして。

彩　　何も言っていないって。

武也　　いや、目が言うてたで、ありがとうつて。

彩　　：　　：。

亮子、みちるに缶ジュースを渡す。

亮子　　（みちるに）はい。

亮子は、みちるを見て微笑む。

みちる　　：　　：え。

亮子　　飲もうや、みんなで。あった温まるで。

みちる　：　：。

亮子　な、みちる。

みちる　：　：うん。

亮子が、みちるの手を引いて三人の所に戻って来る。

そして、武也の前にみちるを連れて行き、みちるの頭を押して下げさせる。

亮子　（武也に）この子、みちる。

武也　おう！

みちる　初めました。

と、みちるは、頭を上げる。

武也　：　：。

みちるを見た武也の表情が変わる。

亮子　ウチの親友。

みちる　え：：。

と、亮子を見るみちる。

一方、武也は、金縛りに会ったように、みちるを凝視していた。

亮子　さ、みんなで乾杯しよ。

武也以外は、皆それぞれに、缶ジュースの蓋を開ける。

それに気付いた亮子は、

亮子　なんや、蓋もよお開<sup>あ</sup>けへんの？

と、武也の缶ジュースを取り、蓋を開けてやる。

詩織　すごいなあ、泊さんて。

彩　あーあ、見てらんない。

亮子 （武也に缶を渡し）はい。

武也 あ：：、どおも：：。

亮子 （缶を上げ）それじゃあ、みんなの再  
会を祝して、乾杯！

詩織・彩・みちる 乾杯。

他の者も、亮子に倣ならってジュースを  
飲む。

武也 ：：：。

武也は、ただ、みちるをじっと見つ  
めていた。

暗転。

3・午後六時三〇分

武也が、中央に目をつぶってしやが

んでいる。

その周りに、同じくしゃがんでいる  
彩、亮子、詩織、みちる、由実子の  
五人。女達は、少々だれている。

武也 トントントン。

五人 何の音？

武也 禿げたオヤジがリストラで肩叩きされ  
た音。

五人 あー、良かった。

武也 トントントン。

五人 何の音？

武也 空っぽの頭をドツいた音。

五人 あー、良かった。

武也 トントントン。

五人 何の音？

武也 とんかつ屋のテーマソングの音。

五人 あー、良かった。

武也 トントントン。

五人 何の音？



武也　ゴジラがソーツと忍び寄って来た音。

五人　あー、良かった。

武也　トントントン。

五人　何の音？

武也　もおーアカンってトイレのドアをノツ

クしてる音。

五人　あー、良かった。

武也　トントントン。

五人　何の音？

武也　壊れた戦車を修理してる音。

亮子　あのかなあー！

と、亮子が、立ち上がる。

武也は、顔を上げる。

武也　なんや？

亮子　いつまで続ける気い？！

彩も、立ち上がり、

彩　ほんとよお！　もう三〇回以上やってるじゃん。

亮子　（武也に）三六回やで。

武也　そやけどな、（取り繕って）ほら、こうでもせな、おもしろいやんけ。

亮子　なんでよ。

武也　追っかけっこばっかししててもつまらんし……。

彩　つままない言葉に合いの手入れてる方がよっぽどつままないよ。

武也　分かった分かった。言えばエエンやろ、おばけを言えば。

亮子　さっさとしてや。

と、亮子と彩は、再びしゃがむ。

武也　はいはい。トントントン。

五人　何の音？

武也　おばけがダンスしてる音。

逃げる準備をしていた亮子と彩は、

亮子・彩　ちよっとー！

武也　愛嬌、愛嬌。

彩　もお、いい加減にしてよ。

武也、大きく息を吸い、

武也　ほな行くで。トントントン。

五人　何の音？

武也　おぼけの音。

五人　キヤー。

と、五人は、走って逃げる。

武也、立ち上がるが、追い掛けるのを少しの間、躊躇する。

が、意を決して、武也はみちるを追い掛けて行った：：。

武也、みちるを掴まえる。

みちる （息を切らしながら）わあ、掴まっ  
た。

武也 （同じく息を切らし）……なあ。

みちる ……はい？

武也 こんなところで会うと思ておもなかつたわ。

みちる ……え？

武也 俺、ずっと自分に謝ろうと思つてたん  
や。俺、あん時な、

みちる （遮って）ちよつと待ってください。

武也 なんや。

みちる 困ります、そんな事言われても。：

・初めて会おうたのに。

武也 ……初めて？

みちる はい。

武也 何言うてんねん、榎本。

みちる ……なんで知つてんの？

武也 何を。

みちる 私の名前。

武也 知つてるに決まつてるやろ。

みちる ……そんな事言われても。

武也　なんでそんな知らん顔すんねん。

みちる　しょうがないですよ、知らないんやから。

武也　そんなに怒ってるんか、俺の事。

みちる　ちよつと待ってください。

亮子、二人の様子が気になり、傍に  
駆けて来て、

亮子　二人で何コソコソ言うてんの。（みちるの腕を引っ張り）みちるの鬼やで。

みちる　うん。

と、亮子とみちるは、その場を離れる。

武也　おい、榎本：：。

亮子　（振り返って）廣田くんも早よおいでや。

武也　：：：：。

武也は、体育館から走って出て行った。

亮子 （武也を見て）何やの、一体。

みちる さあ。

亮子 （みちるに）廣田くん、何言うてたん？  
みちる ……よう分からん。

亮子 ま、エエか。ほな、みちるが鬼な。

みちる うん。

亮子 （両手を差し出し）はい、手つないで。  
せーの。

みちるが中央にしゃがみ、後の四人  
は、手をつないで周りを歩き始める。

四人 ♪ あーぶくたった にえたった

にえたかどうだか たべてみよ

むしゃむしゃむしゃ まだにえない

あーぶくたった にえたった

にえたかどうだか たべてみよ  
むしゃむしゃむしゃ もうにえた ♪

四人は、両手を放し、動作をする。

四人 鍵をかけましょ、ガチャガチャガチャ。  
お風呂に入ろう、ゴシゴシゴシ。お布団敷  
いて寝ましょ。

と、しゃがむ四人。

みちる トントントン。

四人 何の音？

みちる 風の音。

四人 あー、良かった。

みちる トントントン。

四人 何の音？

みちる お母さんの肩を叩く音。

四人 あー、良かった。

みちる トントントン。

四人 何の音？

みちる お母さんが料理をする音。

四人 あー、良かった。

みちる トントントン。

四人 何の音？

みちる お母さんが：：、

四人 ：：：。

みちる お母さんの声が：：。

詩織 榎本さん？

みちる ：：お母さんの声が：：、だんだん

遠くなつて……。

と、顔を上げるみちる。

彩 ：：どうしたの？

みちる （彩と目が合い）：：え。

由実子 大丈夫ですか？

みちる ああ：：、うん。ごめん。：：行く

よ。



と、再び顔を覆うみちる。

みちる トントントン。

四人 何の音？

みちる 教科書とノートを揃える音。

四人 あー、良かった。

みちる トントントン。

四人 何の音？

みちる ボールを突く音。

四人 あー、良かった。

みちる トントントン。

四人 何の音？

みちる 体育館でバスケットをする音。

四人 あー、良かった。

みちる トントントン。

四人 何の音？

みちる 体育館でバスケットをする音。

亮子 今、言ったやん、それ。

みちる 体育館で……、体育館で……。ここ

で……。

と、その場に倒れ込むみちる。

亮子 みちる！

彩 大丈夫？

詩織 榎本さん。

由実子 榎本さん。

みちるの意識が、だんだん遠のいて  
行く……。

そこは、六年前の体育館。  
倒れているみちるの周りに、亮子、  
彩、詩織が、心配そうに居る。

救急隊員 2 ちょっとそこ、どいてどいて。

救急隊の制服を着た者が二人、担架  
を持って駆け込んで来る。

救急隊員 2 どこや。バスケしてぶつかつた子って。

救急隊員 1 ほら、そこどいて。

その騒ぎに、みちるも目を覚ます。

救急隊員 2 どいてって言うてるのが聞こえんか。

救急隊員 1 どこの現場も野次馬ばかり。

救急隊員 2 ほら、下がって下がって。

慌てて壁際まで退く、みちる、亮子、

彩、詩織。

救急隊員 1 どうせ大したことありませんよ。

救急隊員 2 救急隊員がそんな事言ってどうすんねん。

救急隊員 1 だって多いじゃないですか。最

近、救急車をタクシー代わりに呼び寄せる  
ヤツ。

救急隊員 2 おまえは黙って動け。

と、救急隊員達は、慌ただしく駆け  
回っている。

四人は、壁際に並んで、腰を下ろす。  
やがて救急隊員達は、去って行った。

四人の目の前では、バスケットボー  
ルの試合が行われているようだ。

それを退屈そうに眺めている四人：  
：  
：

亮子が、大きな欠伸あくびをする。

亮子 ふああゝ。

暫くすると、詩織も欠伸をする。

詩織 はあゝ。

詩織を見て、クスツと笑う亮子。

詩織 （亮子に）何？

亮子 欠伸、伝染<sup>うつ</sup>った。

詩織 ああ。

彩 寒いのによくそんな欠伸出来るね。

亮子 だってつまらんもん。

彩 確かに。

詩織 しゃあないよ、一回戦で負けてしもたから。

彩 私、苦手だもん、バスケって。

みちる 彩ちゃん、平気で何歩でも歩くもんな。ボール持ったまま。

彩 細かい事、見逃してくれたっていいと思わない？ レクリエーションなんだからさ。

みちる いつ終わるのかなあ、この試合。

亮子 この後、三位決定戦すんねんて。

彩 えー。見てる方は凍え死んじやうよ。

みちる 何かあったかい物<sup>もん</sup>食べたい。

詩織 あったかい物もんなあー。

亮子 お好み焼きとか？

詩織 ハンバーガーやろ。

みちる やっぱ豚まんかな。

彩 私、アイスクリームが食べたい。

詩織 この寒いのに？

彩 寒い時のアイスが美味しいんじゃない。

亮子 なあ、帰りに寄るか？

みちる 何処に？

亮子 駅前のコンビニ。

彩 いいねえ、それ。

亮子 コンビニやったら、なんでもあるや

ろ？

みちる うん、行こ行こ。

彩 ほんと、コンビニエンス。

詩織 何それ。

彩 便利って事。

亮子 えー、コンビニってそうゆう事やった

ん？

彩 知らないで使ってたの？

亮子 知らん知らん。

詩織 へえー。

亮子、ペンを取り出し、壁に向かつて、何かを書き始める。

亮子 ウチはこれやな。

みちる あー、そんなところに落書きしてる。

亮子 エエやん、暇やもん。

彩 何書いてんの？

と、皆、壁を覗き込む。

詩織 “亮子、お好み焼き”

彩 何これ？

亮子 今日食べる物。

みちる コンビニにお好み焼きなんかあったっけ？

亮子 あるやろ、便利なコンビニやねんから。

彩 (亮子に) ちよっとペン貸して。

と、彩も、壁に書き始める。

彩 私：：

みちる ああーあ、彩ちゃんまで。

彩 いいのいいの。

亮子 （読みながら）“彩、アイスクリーム

”

彩 そ。（詩織にペンを渡し）はい。

詩織 うん。（壁に書きながら）私は：：

みちる （読みながら）“詩織、ハンバーガ

ー”

詩織 （みちるにペンを渡し）はい、榎本さ

んの番。

みちる うん。

と、壁に書くみちる。

彩、詩織、亮子、覗き込みながら、

彩・詩織・亮子 “みちる、豚まん”



亮子 個性出てるよな、これってみんな。

詩織 うん、出てる出てる。

彩 お好み焼きが好きなあなたは何でもお好み通り、我が儘な人です。

亮子 えー、そうかあ？

彩 そうゆう事になります。

亮子 じゃあ、アイスクリームが好きなあなたは、氷のように冷たい人。

彩 わ、失礼。

みちる ハンバーガーが好きなあなたは、待つのが嫌いなイラチな人です。

詩織 そうかなあ。

亮子 ほな、豚まんは？

彩 豚まんが好きな人は、食いしん坊で将来、ブタになる人。

みちる 何それ。

彩 だってブタ・マンでしょ？

みちる・詩織・亮子 はあ？

彩 ね。

亮子 しょーもなあ。

彩 そうかなあ。

詩織 小磯さん、初めの頃、そんな事言う人  
やなかったのに。

みちる そうやんな。ここに来た頃、なんか  
スマシてたやんな。

彩 亮子だって来た頃、目つき悪かったよ。  
こおんな目で人の事、睨にらんでさあ。

亮子 そりや、ガードも堅くなるで。どんな  
くせ者が居おるんかって。

詩織 (クスリと笑い) くせ者やって。  
亮子 くせ者やで。他の人からしたらここに

居おるヤツみんな。  
みちる まあ、：：そやな。

彩 学校に行ってるヤツの方がくせ者多いの  
にねえ。

詩織 ：：私ら、問題児扱いやしなあ。  
みちる ：：うん。

亮子、明るい声で、

亮子 記事になるで。「問題児、コンビニを襲撃。買い食いの嵐」

みちる ちゃんとお金払うんや。

亮子 当たり前やん。これ以上、問題児のレツテル増えたらかなわんで。

彩 で、（壁を指し）ここに書いてる物を食べまくる訳？

亮子 そう。

彩 私、一個でいいよ。アイスクリーム。

詩織 私もハンバーガー一個。

亮子 ウチ、お好み焼きなら五枚位行けるで。

その時、みちる、ふと真顔になり、

みちる ……なあ。

詩織 何？

みちる みんな豚まん食べるやんな、今日。

亮子 なんで？

みちる なんてって…。

彩 食べないよ、豚まんは。

みちる だっておかしいやん。

詩織 何が？

みちる みんな食べるはずやろ、今日は豚まん。  
ん。

亮子 エエやん、好きな物食べたら。

みちるの顔が強張り、

みちる みんな一緒に豚まん食べたんやろ、

今日は。

彩 豚まん、豚まんって、なんでそんなにこだわるの？

みちる だって今日はみんなで豚まん食べたやんか。食べたはずやって。

亮子 ちゃうよ。みんなそれぞれに好きな物食べたの。豚まん食べたんみちるだけやって。

みちる 嘘や、そんなん。

亮子 なんでこんな事で嘘つかないあかんのよ、（彩に）なあ。

彩 うん。そんな事でムキになんないですよ。  
みちる だっておかしいやろ。なんでみんな  
そんな事も覚えてないんよ。

詩織 もう、エエやん。な。

みちる エエ事ないよ。おかしいやんか。そ  
れくらいちゃんと覚えといてよ。

亮子 エエやん、ウチらが何食べようが、何  
忘れようが。関係ないやん、みちるには。  
みちる 関係あるよ！

彩 どんな関係があるって言うのよ。  
みちる 忘れたらアカン事かてあるやんか。  
彩 もう：：。（不機嫌そうに）私、トイレ  
行こ。

と、立ち上がる彩。

亮子 あ、ウチも行く。

と、彩と亮子は、その場から離れる。

彩と亮子、歩きながら小声で、

亮子 みちるっていつつも押しつけてくんね  
ん、自分の言い分。

彩 なんとかしなよ。

亮子 え。

彩 仲いいんでしょ。

亮子 仲良く見える？

彩 見えるよ。いつつも一緒に居るし。

亮子 そんなたまたま一緒に居るだけやっ  
て。

彩 え。

亮子 一人で居るのカッコ悪いやろ。友達居  
れへんみたいで。

彩 コンビニエンスな仲。

亮子 : : そんなもんちやうん。

と、彩と亮子は、去って行く。

残った詩織は、戸惑いがちに、

詩織 : : なあ。

みちる ん。

詩織 どっち勝つかなあ、……この試合。

みちる さあ……。

詩織 ……。

気まずい間。

詩織 ……なあ、榎本さん。

みちる ん。

詩織 私、食べてもエエよ、豚まん。

みちる ……うん。

間。

いつからか、ステージで、モーツァルトの「トルコ行進曲」を練習するピアノの音が聞こえている……。

みちる ……音楽教室。

詩織 え。

みちる 音楽教室やってんねんな、そこで。

詩織 ああ、時々やってるな。

みちる エエなあ、ピアノって。

詩織 榎本さん、リビングでようピアノ弾いてるもんな。

みちる ただ見様見真似で弾いてるだけやし下手くそや。……気持ちエエやろなあ、こんな曲弾けたら。

詩織 ちよつと続けたら弾けるようになるよ、これ位やったら。

みちる 無理やわ、難しすぎる。

詩織 そんな事無いつて。私、5年生ん時弾いてたもん。

みちる えっ？ 詩織ちゃん、弾けるの？  
この曲。

詩織 今は弾かれへんよ。もう長いことピアノ触ってへんし、指動かへんわ。

みちる ピアノ習ってたん？

詩織 うん、四才から。でも中学上がる時に辞めてしもた。

みちる へえー。これ、なんてゆう曲？



詩織 「トルコ行進曲」

みちる トルコ行進曲かあ。

詩織 でもモーツァルトやで。

みちる え、他にもあんの？

詩織 うん。ベートーベンもある。バイエルやってた頃かなあ：：、最後の方に出て来たわ。簡単に弾けるように書き直したベートーベンのトルコ行進曲。

みちる ふーん。

詩織 バイエル終わったらブルグミュラーやって、ソナチネやって、その後のソナタの本にこの曲が入ってんねん。

みちる なんか気が遠くなるなあ：：。

詩織 やってたらすぐやって。

みちる でも弾いてみたいな、この曲。

詩織 榎本さん、ピアノ好きやったら習ってみたら？ 音楽教室で。

みちる えー：：。でもあそこ小さい子ばかりかしやん。

詩織 関係ないよ。好きこそ物の上手なれ、

って言うやん。

みちる これ弾けるようになるかなあ。

詩織 なるなる。ピアノ、嫌いな私かて弾けてんから。

みちる 詩織ちゃん、ピアノ、嫌いやったん？

詩織 うん。

みちる ほな、なんで習ってたん？

詩織 なんで？

みちる うん。

詩織 ：：嫌いってよう言わんかっただけ。

．．．いい子で居たかったんよ、いつも。

みちる いい子？

詩織 うん。親や先生の言う事きちんと聞く

いい子。

みちる ：：そうなんや。

詩織 そうせなアカンって思い込んでたわ。

(少し笑い) ：：他の子からしたら鬱陶し

いよな、そんな子って．．．。

詩織は、ただ目の前の試合を見つめ

ていた。

みちる　それでここ来たん？

詩織　：：うん。

みちる　：：そうか。

詩織　榎本さんは？

みちる　え？

詩織　榎本さんは、なんで行けへんようにな  
ったん？　学校に。

みちる　：：：：。

詩織　なんで？

みちる　：：忘れた。

詩織　そんな訳無いやん。

みちる　って言うか、自分で全部消してしま  
た。ここに来た時、もう思い出さへんよう  
に綺麗に全部ゴシゴシゴシって。

詩織　：：そうなんや。

みちる　：：うん。

二人の目の前では、忙しそうに人が

行き来して、バスケットボールの試合が繰り広げられている。

二人は、ただ黙って試合を見ていた  
：：：。

みちると詩織、目は試合を追ったま

ま、

みちる　：　：　詩織ちゃん。

詩織　ん。

みちる　：　：　詩織ちゃんやってんな。

詩織　何が？

みちる　私に音楽教室、勧めてくれたん。

詩織　：　：　そうなんかな。

みちる　：　：　詩織ちゃん。

詩織　ん。

みちる　何食べた？

詩織　え。

みちる　みんなでコンビニ行った時。

詩織　榎本さんは豚まん食べてたよ。

みちる　私じゃなくて詩織ちゃん。

詩織 私？

みちる うん。

詩織 ：：：ホットドック。

みちる ホットドック？

詩織 うん。：：ハンバーガー売り切れて無

かったから。

みちる ：：：そうなんや：：：。

詩織 ：：うん。

みちるは、溜息を吐く。

彩と亮子が、戻って来る。

亮子、みちる達から少し離れた所で、

亮子 ここに居おろ。

彩 え、あっち行かないの？

亮子 うん、鬱陶しいやん。

彩 鬱陶しいって？

亮子 みちる。

彩 ま、いいけど。

と、その場に座る彩と亮子。

四人の目の前では、ボールを突いたり、投げたりと、バスケットボールの試合が、佳境を迎えていた……。

亮子 （試合に向かって）行けー、そこそこ。

走れー。

彩 向こう！ ほら、ゴールの下！ 行け行

けー！

と、試合の応援を続ける彩と亮子。

みちる なあ、詩織ちゃん。

詩織 何？

みちる 私な、………（何かを言っている）

床にボールを突く音や、人が飛び跳ねる音、応援の声に、みちるの声は、掻き消された。

詩織、みちるを見て、大きな声で、

詩織　なんて？

みちる　（大きな声で）え？

詩織　なんて言うたん？

みちる　あのな、私な、………。

みちるも、大きな声で言っているが、  
やはり何を言っているか聞き取れな  
い。

詩織　（さらに大きな声で）聞こえへん。

みちる　（大きな声で）もうエエわ。

詩織　え？

みちる　もお、エエ！

詩織　分かった！

二人は、仕方なしに試合を見る。

試合は、益々、白熱して行った。

やがて、試合に熱中する人々の音は、

次第に轟音と化し、体育館全体を渦の中へと巻き込んで行く。

そこに居た人々は、その場に押し倒されて動かなくなつた……。

ヘルメットを被った男（以下、男）と、由実子が、毛布を持って慌ただしく行き来している。

由実子 すいません！

男 なんや。

由実子 今、あっちに一つ確保出来ました。

男 やつと一つか。

と、男は、ポケットから紙を取り出しながら、

男 こんな事で順番待ちやからなあ……。

由実子 ……はい。

男 （紙を見ながら）棺桶も無くて毛布にく



るまっただまななんて想像もせんかったやろ  
な、この人らも。

由実子 ……はあ。

男 （紙を指し）この中に入らんかっただけ  
でも幸せや。

由実子 ……。

男 悪いな、こんな事まで頼んで。

由実子 いいえ。

男 （由実子を見て）君も大変やろうけど頑  
張ってくれや。

由実子 なんでも言ってください、私に出来  
る事ならなんでもしますから。その為にか  
こまで来たんで。

男 助かるわ。

由実子 私、見つけたいんです。こんな私で  
も役に立つ事。こんな私でも何か出来るっ  
て事。探してるんです。

男 ……探してるか……。

由実子 はい。

男 ……俺も見つけないアカンな。

由実子　ちゃんとやってるじゃないですか。  
こんなに今、一生懸命に。

男　ちやうちやう、人間や。俺が探してるヤツ。

由実子　え：：。

と、由実子は、男を見る。

男、紙を見ながら、大きな声で叫ぶ。

男　榎本みちるさんの御家族居おられますか  
あ？　榎本みちるさん、一つ確保出来ま  
した。

と、二人は、みちるを毛布で包むと、  
みちるを抱えて、去って行った。

ただ、静寂：：。

暫くして、詩織が、目を覚ます。

詩織、辺りを見回し、

詩織　：：：榎本さん：：？

誰も応えない。

詩織 榎本さん……。 (大きな声で) 榎本さ

あーん。

その声に、彩と亮子も、起き上がる。

みちるを探している詩織。

詩織 榎本さーん。榎本さあーん。

亮子 : : : そうやったんや。

彩 え。

亮子 やっぱりそうやったんや。

彩 やっぱりって？

亮子 ウチ、見てん。

彩 何を？

亮子 (大きな声で) ウチ、見てん。

彩 だから何を？

亮子 あん時、テレビでたくさんの人の名前  
が並んでたやろ。知らない人の名前に混じ

ってみちるの名前があってん。

詩織　：：：そうなん？

亮子　ビツクリしたけど、：：：ああ、そうなんかって思たおも：：：。

詩織　（亮子を見て）泊さん、知ってたん？

亮子　：：：うん。

詩織　泊さん、なんでその時、教えてくれなかったん。

亮子　：：：え。

詩織、亮子に詰め寄り、

詩織　なんでそんな時すぐに教えてくれへんかったん、榎本さんの事。

亮子　：：：そんな事言われても。

詩織　水臭いやんか、それまで毎日一緒に居おった仲間やのに。

亮子　そんな事言うけどな、それから今迄、ウチら会おうたか？

詩織　：：：え。

亮子 一回でも会<sup>お</sup>うたか？

詩織 ：：それは。

亮子 そやろ。会<sup>お</sup>うてへんやろ、一回も。そしたらみちるの事も言われへんやんか。ずーっと会<sup>お</sup>うてなかったら相手が生きてても死んでても一緒やんか。

詩織 それのどこが一緒なんよ。

亮子 一緒や。どこかで元気にしてるけど会<sup>お</sup>うてないだけやって思えて来るやん。きつと今もどこかで何かしてるんやって、そんな気になるやんか。そうゆう気持ちだけが残ってその人の事、だんだん思い出さへんようになって来るやんか。忘れて行くやんか。今、どうしてるんかなあ、とかも考えへんようになって来るやんか。

詩織 そやけどな、

亮子 (遮って) そんなら詩織ちゃん、今日までにみちるの事、考えた事あったか？ 一度やってみちるの事、思い出した事あったか？

詩織 そりゃ思い出した事はあったよ。どう  
してるんかなあって。

亮子 それで連絡取ったか？

詩織 ……。

亮子 ほらな。誰かってふっと考える事はあ  
ってもただそんだけやねん。そんだけの物  
やねん。連絡もせえへんで悪いなあ、って  
気は何処かにあってもな、連絡なんかせえ  
へんねん。そんだけでしかないねん。そや  
から今日、みちる見た時に思たんやんか。  
やっぱりみちるは元気やったんや。何処か  
で毎日ウチが何かをしてる間、何処かで毎  
日みちるも何かをしてたんやって。テレビ  
で見たみちるの名前は間違いやったんやっ  
て。そう思たんやんか。

詩織 そんなんおかしいわ。

亮子 おかしないわ。

彩 ……詩織。

詩織 何。

彩 亮子の言う通りよ。

詩織 小磯さんまで。

彩 そんなもんよ。

詩織 え。

彩 そんなもんだって。

詩織 それ、私、嫌いや。

彩 何が？

詩織 “そんなもんや” って言うの。なんでもかんでも“そんなもんや” で済む訳ないやんか！

彩 ……。

その時、みちるが、現れる。

亮子 ……みちる。

詩織 榎本さん…。

みちるは、寂しく微笑んでいる。

詩織 榎本さん、ちやうよ。ちやうねんでみちる エエねん、詩織ちゃん。

詩織　　そんな：：。

彩　　：：みちる：：。

亮子　　聞いてたん？　　今の話。

みちる　　：：うん：：。

亮子　　：：：ごめん。

みちる　　ううん、エエねん。　　しゃあない事や  
から。

亮子　　え。

みちる　　しゃあない事や、生きてたら。

亮子　　：：：。

長い沈黙が訪れる：：：。

みちる、意を決してにっこり笑い、

みちる　　今日は私、約束してたから来ただけ  
やもん。

彩　　約束？

みちる　　うん、この体育館に。

詩織　　どんな約束？

みちる　　いややなあ。それも忘れたん？



と、みちるは、壁の落書きの所へ行く。

みちる、そこを指さし、

みちる ほら、ここ見て。

彩 ここってあれでしょ、何が食べたいってやつ。

みちる ちゃうちゃう、そのもうちよつと下やって。ほら、ここ。

みちるの指さす方を覗き込む亮子、  
詩織、彩。

亮子 : : あ、こんなところに。  
みちる な。

亮子、詩織、彩、その文字に釘付けになる。

みちる 詩織ちゃん、読んでみて。

詩織 “二一世紀の今日、ここで会おう”

みちる 彩ちゃんも。

彩 …… “二一世紀の今日、ここで会おう”

みちる 亮子も。

亮子 ……。

みちる ほら、亮子も。

亮子 …… “二一世紀の今日、……ここで：

……会おう”

みちる な、これ書いた時に約束したやんか。

二一世紀になったら今日、ここで会おうな  
って。

彩 …… そうだったんだ。

亮子 (みちるに) ウチら、ほんまにそんな

約束したん？

みちる …… ん？

亮子 なあ、みちる。

みちる 多分な。

亮子 何？ 多分、って。

みちる 約束したかも知れんし、してないん

かも知れん。

亮子 何よ、それ。

みちる そうゆうのってもう誰にも分からへんねん。過ぎてしまった事はもう誰にも：。

亮子 ：：誰にも分からへん：：。

みちる うん。

みちるは、詩織を見て、

みちる 詩織ちゃん。

詩織 何？

みちる 出られへんかったわ、ピアノの発表会。

詩織 ：：榎本さん。

みちる 弾きたかったなあ：：、「トルコ行進曲」。

詩織 弾いてたって、榎本さん、ちゃんと。

みちる 弾いてないよ。

詩織 弾いてたって。さっきそのステージ

で「トルコ行進曲」。

みちる　　ちやうよ、ポロロロン、ポロロ  
ロンってやつ。

詩織　　：：モーツァルト。

みちる　　：：うん。

詩織　　：：榎本さん。

みちる　　何？

詩織　　ごめん。

みちる　　なんで謝んの？

詩織　　私、榎本さんの代わりに弾くわ、って  
ほんまやったら言うべきなんかも知れん。

榎本さんの分まで、指動くようになるまで

「トルコ行進曲」一杯練習するよって。：  
：：でも、言われへん。

みちる　　なんで？

詩織　　だってそんな約束する方が失礼やん。  
今の感情でそんな事言うても、出来るかど  
うか分からんのに、また忘れるかも知れん  
のに、忘れた事さえ覚えてないかも知れん  
のに：：：。

みちる　：　：　エエよ、そんなん。

詩織　　：　：　本当に：　：、ごめん。

みちる　：　：　エエって：　：、もう：　：：　：。私、  
行くわ。

詩織　榎本さん。

三人から離れるみちる。

その時、武也が、駆け込んで来た。

手には、古くなったクツションを持

っている。

武也は、息を切らして、去ろうとす

るみちるの腕を掴む。

武也　榎本。

みちる　痛い！

武也、ハツとして、腕を放す。

武也　　：　：　ごめん。

みちる　いい加減にしてください。

みちる、そのまま去ろうとする。

武也　ちよつと待っていてくれや。

みちる　なんですか。

武也　俺、やっぱりちゃんと一言なアカンから帰って来た。

みちる　ちゃんと？

武也　ああ。

みちる　廣田さん：：やっけ。

武也　そうや。

みちる　悪いけど私、知らんって。今迄、会  
うた事も無いし、

武也　（遮って）もう止<sup>や</sup>めてくれや、知らん  
顔すんの。

みちる　知らんから知らんって言うてるだけ  
でしよ。

亮子　廣田くん。

武也　（亮子に）悪い。俺、今、話があんね  
ん、コイツに。

彩、亮子の腕を引き、

彩 亮子。

亮子 : : うん。

と、彩、亮子、詩織は、二人から少し離れる。

武也、クッションをみちるの前に差し出し、

武也 これ。

みちる 何。

武也 覚えてるやろ。

みちる 何なん、これ。

武也 榎本やろ、コレ作ったん。

みちる : : 私が？

武也 榎本やないか、俺にコレくれたん。

みちる え : : 。

武也 そうやろ。中二のバレンタイン・デー

にチョコと一緒にコレくれたやないか。

みちる　私が？

武也　ちようど部活に行く時、部室の前で俺に渡してくれたやないか。

と、クッションをみちるに押しつける武也。

武也　体育館のそっちに体育倉庫があって、向こうの角が部室やったやろ。そこに俺が入ろうとした時、おまえ、大きな紙袋持って走って来て、「これ」って俺にギユツて押し付けて、くれたやないか。そやろ？

みちる　…：そうなん…：？

と、みちるは、クッションを見つめる。

武也　榎本は逃げるみたいに行っちゃおうし、俺はビックリして礼も言えんかった…：。



そやけど、紙袋持って部室に入ったら連れ  
がコレ持って学校中、走って言いふらして  
えらい噂になってなあ……。次の日から、  
おまえ、学校に来えへんようになってしも  
た。

みちる　：：：そうやったん。

武也　え？

みちる　そんな事があつたん……。:

武也　なんでやねん。俺、ずっと気になって  
何遍かおまえんち行こうと思たんやで。

みちる　ほんで、来たん？

武也　え。

みちる　うちに。

武也　：：：よう行かんかった……。行ったら  
また冷やかされるし。

みちる　なんや。

武也　そんな事言うけどな、俺かて学校休み  
たかったで。おまえがこんな事しなかつた  
ら要らん事言われんでも済んだ訳やし、当  
のおまえは居らんし、なんで俺だけがって

思<sup>おも</sup>たりもしたわ。

みちる 迷惑かけてたんや、私。

武也 でも噂なんてみんなそのうち忘れるやろ。

みちる 忘れる？

武也 そうや。何ヶ月かしたら誰も何も言わなくなつたわ。それやのおまえは学校来<sup>け</sup>えへん。学校に<sup>け</sup>来えへんおまえの事もみんな一緒に忘れてつたわ。どんどん、どんどん忘れてつてな、そうなるにつれて俺はおまえに悪い事したなあつて思いが大きくなつて……。

みちる ……そんな事があつたんや……。

武也 ほんまに忘れたんか？

みちる ううん、……忘れたんちやうねん。

武也 え。

みちる 忘れたくても忘れられんから、蓋して思い出せへんようにしてん。パタンつて木の蓋……。

武也 ……木の蓋……。

みちる うん。思い出したくない事もあるや  
ん。

武也 そうか……。

みちる だから今は……、今となっては……、  
エエ事しか覚えてないねん。

武也 ……。

みちる ……この事やったん……、私が自分  
で蓋した事って……。

武也 俺な、いつか榎本に絶対謝らなって思  
てたんや。

みちる ……廣田くん。

武也 ほんまに悪かったな。許してくれや。

と、頭を下げる武也。

みちる、武也を起こし、

みちる なあ。

武也 ん。

みちる ……そんな事、気にしてたんや。

武也 ……え。

みちる そんなふう<sup>おも</sup>に思<sup>おも</sup>てくれてたんや。

武也 ……まあな。

みちる そんな形で覚えてくれてる人も居<sup>お</sup>る  
んやなあ……。(クッションを見て) こん  
なにボロボロになるまで使<sup>つか</sup>てくれて。

武也 ……。

クッションを武也に返すみちる。

みちるは、大きく微笑み、

みちる エエよ！ もう。

武也 ……うん。

みちる 廣田くん、やっぱり私、今日ここに  
来て良かったわ。

と、みちるは、駆けて行く。

武也 何処行くねん。

亮子 みちる。

みちるは、立ち止まり、

みちる 私、もう行くわ。

彩 行くって何処に。

みちる (遠くを指さし) あっちに。

亮子 あっち？

みちる うん。みんなも早<sup>は</sup>よ帰りや。

詩織 榎本さん。

みちる もう、体育館なんて無いんやから。

彩・詩織・亮子 えっ？

みちる ひび一杯やったやろ、ここ。二一世

紀には新しい体育館にしようって壊されて  
ん。来週から工事始まるわ。

周りを見回す亮子、詩織、彩。

辺りには、廃材が山と積まれている。

みちる だからね……、バイバイ！

と、みちるは、小さく手を振ると、

去って行った。

彩・詩織・亮子・武也　　：　：　：　：　。

みちるを、じつと見送る武也。

亮子、詩織、彩は、ただ辺りを見回  
していた。

溶暗。

遠く空の上から、みちるの声が聞こ  
えた。

みちるの声　トントントン。何の音？

《幕》